
俺と私

学校嫌い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と私

【Nコード】

N1573X

【作者名】

学校嫌い

【あらすじ】

自分が嫌いな俺と、自分が好きな私の話。

惹かれ合った理由

世の中に自分を嫌っている人間はどれほどいるのだろうか？

そんなことを考える奴なんて余りいないかも知れないが、俺はほぼ毎日考えている。

そして結局途中で考えるのを止める。

要するに俺は自分が嫌いだ。

いつからかは分からないが、中学生のある日にふと自分が自分を嫌っているということに気付いた。

それからはとにかく嫌いで仕方無かった。

理由はあるがわざわざ言う必要はないだろう。

誰も興味など無いのだから。

そんなことを考えながら俺は今日もただ通学路を歩く。

周りには同じように学校までの道を歩く生徒がいて、楽しく話したり、音楽を聴いたり、自転車を漕いだりと様々な登校風景がある。

そんな中を歩いていると当たり前だが嫌でも周りの奴の声が耳に入ってくる。

俺はそれをヘッドフォンで遮断して、学校までただ歩く。

校門が見えた時、強い風が吹き周辺にある桜の木から花びらが散り風に乗って飛んでいく。

そんな風景を眺めながら俺は少しの間、その場で立ち止まっていた。

「

?

」?

視線を前に戻して校門へ向けて足を進めようとする、後ろから肩を軽く叩かれた。

振り向くとこの学校の生徒であろう、女生徒がいた。

髪は茶色で腰元までのストレート。

瞳は大きく綺麗な紅。

背は俺よりも頭半分ほど小さい。

クリーニングにでも出していたのか、制服には全くと言っていいほど汚れがなかった。

「?」

女生徒は首を傾げて俺を見ている。

「

」?

女生徒の口が動き、何か言ったが聞こえずそう言えばヘッドフォンをしていたな、と思い耳から外す。

「なんだ?」

「お、やっと外したかい？そうそう、人と話すときはそういう物は外しておかないとね？」

これは当たり前のことだよ？」

「なんだ？」

もう一度同じことを問う。

「ん？ああ、そうだった。君はこんな所で何をしていたんだい？まだ遅刻をするような時間では無いが、ずっとここに居ると遅刻してしまうぞ？」

「今から行くこうとしていたらあんたが肩を叩いてきたんだよ」

俺はそれだけ言ってからその場を離れ、校内へと入っていった。

後ろで何か「それは済まなかったな？」などと言う声が聞こえたが、すぐにヘッドフォンをかけ直して周りの音を再度遮断する。

昇降口前に張り出されていたクラス表を見てから、下駄箱から上靴を取り出しそこに靴を入れる。

階段を上がり2階へと向かい、廊下を進んで自分のクラスであるF組へ。

扉を開けて中に入り、窓際の一番後の席に腰掛けて、特にすることも無く音楽を聴きながら外の景色を眺める。

クラス内はヘッドフォンを着けていても音が聞こえる程賑わっていた。

やがて始業を告げる鐘がなり、1〜2分ほどして担任が入ってくる。それから始業式があるため全員体育館へそれぞれのグループを作り向かう。

俺は全員が出た後に席を立ち、静かな廊下を歩く。

渡り廊下を通って体育館へ向かう途中、さっきの女生徒と遭遇した。

俺はそのまま素通りしようとしたがあちらが俺に気付き声を掛けてきた。

「おや、また会ったね？いきなりで済まないが、体育館へ案内してくれないか？」

道に迷ってしまったね」

「.....」

指であつちと示して、その方向へ向かうと女生徒も後からついてくる。

体育館に向かうまでの間、女生徒はひたすら何か話していたが、気分じゃない俺は何の反応もしなかった。

それでもお構いなしに喋り続ける女生徒。

体育館に着くと女生徒は先に入っていた。

最後に何か言っていたが、ヘッドフォンで聞こえなかった。大したことは言っていないだろう。

俺も体育館に入り、自分のクラスの奴等が並ぶ列に加わる。

程なくして始業式が始まり、無駄な話が終わってからまたクラスに戻った。

クラスに戻って担任を待っている間も他の奴等は騒いでいた。

ほどなくして担任が来て、転校生がいると言って廊下の方を向いて「入ってこい」と言うと、扉が開き女生徒が入ってきた。

そいつはここまでで既に2回遭遇した奴だった。

一瞬目が合ったが、別段興味もない俺はすぐに目を逸らし、朝と同じように窓の外を眺める。

桜の木の枝に1羽のクラスが止まっていた。

周りをキョロキョロと見回してから飛び立ったクラスは遠くにいた群れと合流し同じ方へ飛んでいった。

その群れを見えなくなるまで追っている頃には、女生徒の自己紹介も終わっていて、最後列に向かってきた。

空いている隣の席に座り俺に挨拶をしてくる。

「まさか同じクラスとはな・・・よろしく頼むぞ?」

「はいはい。ま、俺は何もしないから別の奴に頼めよ」

「つれないな? まあ、いいさ」

それから、担任が明日から授業だから今日は遊びまくれ、などと

適当なことを言っただけでHRは終わり。
放課となった。

ヘッドフォンを着けてから、ポケットに突っ込んだ手と腰の間に鞆を挟み教室を出て行く。

下駄箱に行き靴を履き替えて家へと向かう。

30分程で住んでいるアパートが見えてきて、後数十歩で玄関に到着すると言ったところまで来た時、朝と同じように肩を叩かれた。後を振り向くと何故か、転校してきた女生徒がいた。

「何やってるんだ？」

ヘッドフォンを外して問うと女生徒は呆れたと言っている風に言った。

「私もこのアパートに住んでいて名な？一緒に帰ろうと思っていたが、君ときたらさっさと教室を出て行ってしまっただけか・・・」

「そうか・・・だが、俺もたった今家に着いた所だからな？残念ながらここでお別れだ。
じゃあな？」

「ん？君の部屋はここなのかい？」

「ああ。別にあんたには関係ないだろうがな」

「いやいや、大いに関係あるとも。私の部屋は隣なのだからね？」

「・・・・・・・・・・は？」

後ろを向くと女生徒は俺から見て左を指さしていた。

その方向には確かに家がある。

だが、近所付き合いなんて物とは程遠い生活を送ってきた俺は隣に誰が住んでいるのかなんて考えたことも無かった。

関わることなんて無いと思っていたからだ・・・。

「いや、世間は意外と狭い物だね？部屋も隣、席も隣とは。

まあ、改めてよろしく頼むよ？」

そう言って手を差し出して来る女生徒。

俺と女生徒の距離は少し離れている為、握手をするには俺か女生徒のどちらかが近づかなければならないが、向こうから近づいてくる気配は無い。

だが、だからと言って引く気配も無い。

早く家に帰りたい俺は仕方なく近づいてその手を握った。

「はいはい。じゃあな？」

「うむ。また明日、学校でな？」

ひらひらと手を振って鍵を開けて家に入り、靴を脱いで家上がり、

冷蔵庫からボトルのお茶を取り出し3分の1程飲んだ所で、キャップを閉めて冷蔵庫に戻した。

それからブレザーを脱いでベッドに倒れ込む。

「はあ・・・」

ため息を付いて目を閉じるとすぐに眠気が襲ってきた。

腹は減っていたが、作るのも面倒だからそのまま睡魔に身を委ね、俺は眠りに着いた。

世の中に自分が好きな人はどれくらいいるのだろうか？

私はいつもそんなことを考えている。

そして、結局考えても分からないが必ず居るだろうという結論に達する。

要するに私は私が好きだ。

理由？

そんな物は存在しない。

誰だっけそうだろう？

好きなことに対して「何故好きか？」と問われれば、殆どの人が明確な理由を答えられないだろう。

答えられたとしても、結局それは自分にしか分からない理由だ。

私もそうなのだ。

ただ、自分が好きだから好き。

それしか言えない。

私は今、今日から通うことになった高校へと向けて歩を進めている。

次第に校門が見えてきて、周りの生徒達が進んでいくのにも関わらず立ち止まっている生徒がいた。

気になった私は肩を軽く叩き、声を掛けてみた。

「おーい、君？こんな所で何をしているんだい？」

聞くとその生徒は私の方を振り向いた。

髪は黒く寝癖なのか癖毛なのかツンツンしている。

目は私とは対照的な蒼。

背は私よりも頭半分ほど高い

「？おーい？」

もう一度声を掛けると彼はヘッドフォンを外して、

「なんだ？」

と聞いてきた。

「お、やっと外したかい？そうそう、人と話すときはそういう物は外しておかないとね？」

これは当たり前のことだよ？」

と私が言うと、

「なんだ？」

もう一度同じことを聞いてきた。

「ん？ああ、そうだった。君はこんな所で何をしていたんだい？まだ遅刻をするような時間では無いが、ずっとここに居ると遅刻してしまうぞ？」

「今から行くこうとしていたらあんたが肩を叩いてきたんだよ」

彼はそれだけ言うと校内へと入っていった。

「それは済まなかったな？」

彼は何も言わずに昇降口へと向かっていった。

私も中に入り、先生に挨拶をするために職員室へと向かった。

「ああ、あんたが今日から転入してくる子？」

「はい」

それから簡単な説明を受けてこれから始業式があり、クラスの人達には後で紹介するから先に体育館に行っていると言われた。

言われたが・・・

「どう行けばいいのだろうか？」

道が分からなかった。

この学校は結構な大きさがあり、全校生徒の数は10000人を超えるらしい。

確かに登校中に見た生徒だけでも、それなりの数がいた。

それだけの数の生徒を納めるこの学校が体育館の行くだけでも結構な距離があるのは少し考えれば分かるが、そこまでの行き方を私は知らない。

仕方無く職員室を出て勘を頼りに体育館があると思われる方向へと向かう。

暫く進んでいると渡り廊下の所で先ほどの彼と遭遇した。

チャンスと思い私は声を掛けた。

「おや、また会ったね？いきなりで済まないが、体育館へ案内してくれないか？」

道に迷ってしまっただね」

「・・・・・・・・」

彼は何も言わず指だけで方向を示して、歩いていった。

それから体育館に向かうまで、私はとにかく口を動かさず続けた。

さっきまで知らない場所で、誰もいなかった状況というのは私に結構な心理的ダメージを与えていたみたいだ。

彼は何も返してくれなかったが、別にそれでも良かった。

暫く歩くと体育館に到着した。

「ありがとう。助かった」

彼はまたヘッドフォンを着けていたからおそらく聞こえてはいないだろう。

案の定彼は無反応。

私は先に体育館に入った。

中に入って暫くすると始業式が始まり、校長先生や教頭先生の挨拶があり、諸連絡などが終わり、生徒達はそれぞれの教室へと帰っていく。

私はもう一度職員室へと向かった。

「おお、来たか。そんじゃ、行くぞ？」

「はい」

「まあ、緊張する必要は無い・・・気楽に行けばいいさ」

「そうですね。ありがとうございます」

2回へと上がり、教室に着き、先に先生が中に入っていく。

程なくして「入ってこい」と言われ、私は扉を開けて中に入り、ざつと教室を見渡すと、彼がいた。

一瞬目が合って手を振ろうと思ったが、すぐに逸らされたしまった。

自己紹介をしている間も彼はずっと外を見ていた。

自己紹介が終わり、私は先生に言われた席、彼の隣の席に腰掛けてもう一度挨拶をする。

「まさか同じクラスとはな・・・よろしく頼むぞ？」

「はいはい。ま、俺は何もしないから別の奴に頼めよ」

「つれないな？まあ、いいさ」

その後、先生は今日は適当に遊べ〜と言って、放課となった。

彼はすぐに席を立ちヘッドフォンを着け、鞆を腕と腰の間に挟み教室を出て行く。

その後を追おうと思い、私も席を立ち教室を出ようとしたが、何故かクラスの人たちから質問攻めにされて、たっぷり10分は身動きが取れなかった。

「すまない！今日は荷物の整理などがあってだな？早く戻らなければならぬんだ。
だから通してくれないか？」

そう言うと、なんとか解放してもらえた。

私は急いで彼の向かったであろう方角に進む。

私が来た時彼は私に背を向ける形で立っていた。
だから、私が来た方向と同じだろうと思い、後は勘に任せてひたすら進んでいった。

15〜20分くらいだろうか？

途中で少し走り、家に向かって居ると彼を見つけた。
彼はちょうど家に入ろうとしている所だった。

そこは私が住んでいるアパートだった。

何故、今まで気付かなかったのだろうか？

と、今はそんなことを考えている場合ではない。

私は駆け寄り朝と同じように肩を叩いた。
すると彼は、

「何やってるんだ？」

とヘッドフォンを外して聞いてきた。

「私もこのアパートに住んでいて名な？一緒に帰ろうと思っていた

が、君ときたらさつさと教室を出て行ってしまうのではないか・・・」

「そうか・・・だが、俺もたった今家に着いた所だからな？残念ながらここでお別れだ。」

「じゃあな？」

私が答えると彼はそんな風に言った。

「ん？君の部屋はここなのかい？」

「ああ。別にあんたには関係ないだろうがな」

「いやいや、大いに関係あるとも。私の部屋は隣なのだからね？」

「・・・・・・は？」

家に入ろうとしている彼の背中にそう声を掛け、私の部屋を指さす。振り向いた彼は隣をみてから、たっぷり間を開けて、間の抜けた声を出した。

「いや、世間は意外と狭い物だね？部屋も隣、席も隣とは。」

まあ、改めてよろしく頼むよ？」

私はそう言っ手差し出す。

私と彼の距離はどちらかが近づかないと握手は出来ない距離だ。

少しして、彼は観念したかのように近づいてきて握手してくれた。

「はいはい。じゃあな？」

「うむ。また明日、学校でな？」

しかし、すぐに手を離されて彼は後を向き、手をひらひらと振って
そう言い、鍵を開けて中へと入っていった。

パタン、と扉が閉じる音を聞いてから私も隣の部屋の扉に鍵を差し
込み、解錠して中に入った。

靴を脱いで、手洗いうがいをし冷蔵庫から昼食の材料を取り出して、
チャーハンを作って食べる。

食べ終わったら台所で食器を洗って、制服のブレザーを脱ぎ、リボ
ンを緩めてベッドに腰掛け、なんとなくテレビを点ける。

テレビを見ながら私は今日会ったばかりの彼のことを考えていた。

何故かは分からないが、彼に惹かれる。

単に最初に言葉を交わしたからなのかも知れないが……。

とても今日会ったばかりとは思えない何かが、彼にはあった。

「私はそれが知りたい……」

生まれて初めて自分以外の人間に興味を持った。

自分が好きだという彼女と、

自分が嫌いだという彼。

俺と彼女は

ない。

私と彼は

正反対だからこそ、互いに惹かれあったのかも知れ

4月20日 水曜日

学校が始まってそろそろ2週間。
特に何も

「よし、弁当を食べようではないか！」

あった。

彼女は先週の火曜日から突然俺と飯を食い始めた。
理由をきこうかとも思ったが、面倒だから止めた。

1週間経てば人間たいていのことは慣れる物だ。

俺に向けられるクラスの奴の視線も含めてな。

最初は単なる気紛れだと思っていた。
すぐに終わると。

だが、そうはならずまだたった1週間とはいえ、こうして今日も彼女は自分のいすを、俺の机の横に持ってきて座り弁当の包みを開け始める。

これもすっかり見慣れた光景。

違うのは毎日変わる弁当の包みと中身だけ。

今日の包みは青を基調として、周りには白で花が彩られている。

昨日は白を基調としたもの。

一昨日は緑を基調としたもの。

覚えているのはそこまで。

「今日はこの唐揚げが自信作なんだ。どうだ？食べてみたいくないか？」

「別に」

「む、唐揚げは嫌いかな？」

「というより脂っこい物は苦手なんだよ。俺の弁当も野菜とかが多いだろう？」

「おお、言われてみれば」

言いながら弁当箱の蓋を開けて中身が見えるようにする。

俺の弁当は魚や野菜が中心で肉類は端っこにウィンナーが2本ほどあるだけ。

彼女の弁当はさっき言っていた唐揚げ等が中心で、俺は食べる気が全くしない。

正直言っただけで気分が悪くなってくる。

昨日、一昨日も同じ様な弁当だったが、今日は油物が多いから尚更だ。

話は変わるが彼女は自分が好きみたいだ。

弁当を俺の席で最初に食べ始めた時に言っていた。

その時、俺は自分が嫌いだと言った。

「それにしても、自分を嫌うとは・・・哀しいと思わないのかい？
折角この世に人間として生を受けたのに、『嫌い』だなんて・・・
親御さんも悲しむぞ？」

「望んで人間として生まれた訳じゃないし、俺に親はいない」

「っ・・・それは「謝」ったりするなよ？」え？」

「俺は家族がいないことに対して、特に何も思っていない。
それなのに、謝られたりしたら迷惑だ」

「そうか・・・ちよつと飲み物を買ってくるよ」

彼女は席を立ち教室を出て行った。

「茶ならいつも持ってきてるだろ・・・」

俺はぼつりと呟いた。

『家族がないことを何とも思っていない』

彼はそう言った。

確かにそんな人間は居るだろうが、おそらくその殆どが虚勢だろう。本心ではいつも泣いているのかも知れない。目を見ればホントかウソか少しくらいなら分かるが、彼は違った。

本当になんとも思っていないかった。

まだ会ってたったの2週間程度だが、いつもの目と違うことくらいは分かった。

「・・・お母さん、お姉ちゃん」

思い出すと涙が溢れてきた。ペタンとその場に座り込む。

私にも家族はいない。

5年前にお父さんは病気で他界し、残された私たちをお母さんは無理をしながらも育ててくれた。

だが、その無理が祟って3年前に倒れそのまま目を覚ますことは無かった。

お姉ちゃんはある日の朝、起きたら手首から血を流して死んでいた。

訳が分からなかった。
前日に2人で頑張って生きていこうって、約束したばかりだったの
に……。

「う……おかあ……さん……お姉……ちゃん……お父
さ……ん」

誰もいないことを確認して来た場所だから声を上げて泣いても多分
バレはしない。

それでも、どうしても声を抑えてしまう。

「そろそろ授業が始まるぞ?」

「ふえ?」

突然声を掛けられて反射的に顔を上げるとそこには彼がいた。

4月20日 水曜日 2

もうすぐ昼休みが終わるといふ頃になつても彼女は戻つてこなかった。

机にはまだ、彼女が手を着けていない弁当がポツンと置いてある。

仕方無く俺は彼女を探しに向かい、何となく居るのではないかと感じる方向へと向かつて進んでいくと蹲り、声を殺して泣いている彼女を見つけた。

どうして泣いているのかなど、俺には関係も無いから、

「そろそろ授業が始まるぞ?」

それだけ言った。

「ふえ?」

彼女は間抜けな声を出しながら顔を上げた。

彼女の目には涙が溜まっていて、それは今も止まることなく流れ続けている。

「どうして、ここに?」

突然彼女が聞いてきた。

「いつまでも弁当を放置されてると困るんだよ。脂っこい物は苦手

って言ったろ・・・見ているだけでも気分が悪くなるんだ」

「・・・あはは・・・それは酷いな。今日のは結構自信作だったのに」

「あんたの自信作だろうと何だろうと、俺に取っては迷惑だ。食うか、片すかしてくれ」

乾いた笑いを浮かべてそう言う彼女に返すと、

「君が食べれば良かったのに・・・」

と言ってきた。

「はあ・・・この短時間で同じ説明を3回もさせる気か？あんたは・・・」

「本心だよ。君に食べてもらいたいと言う思いも確かにあるんだ・・・私には」

「はいはい。・・・しょっと」

「？何をしているんだ？」

少し離れた位置に腰掛けた俺を見てそう聞いてくる彼女。

「何を言っても動きそくに無いからな。授業も面倒だし、俺はここでサボることにする」

ヘッドフォンを掛けて音楽を流しながら目を閉じる。

彼女が動く気配は無かった。
俺同様にサボるつもりなのかも知れないが、まあ彼女の場合勉強は出来るのだから問題ないだろう。

キンコーンカーンコーン・・・と午後の始業告げる鐘の音が校内に響いた。

少し離れた位置に腰掛けた彼はヘッドフォンを付けると目を閉じながら堂々とサボる宣言をした。

私はそんな彼を見て、彼同様サボろうかと思った。

そして直後に始業を告げる鐘が鳴る。
今から言っても完全に遅刻だ。

弁当はどうしようか・・・放課後にでも片付ければいいたろうか？
もしかしたら誰かが食べてしまったかも知れない。

それは困るな。

今日の弁当はさっきも言ったが彼にも食べてもらおうと思っ
てもより気合いを入れて作ってきたのに・・・。
彼にはあっさり流されてしまったが、あれは本当に本心だ。

だが、脂っこい物が苦手とは・・・観察していた筈なのにテンションが上がっていて気づけなかった。
彼の弁当箱には本人が言っていた通り、野菜が中心で肉類はウィンナーが少しあるだけ。

明日は野菜で攻めてみようか？

うむ、そうしよう。

そしてふと気づく。

さっきまで胸中を渦巻いていた感情がすっかり消えていることに。

何故か今は酷く落ち着いている。

さっきまでの悲しみがまるで嘘のように、酷く静かだ。

「君のお陰なのかな？これは・・・」

彼の方を見ると、

「・・・スウー・・・スウー・・・」

穏やかな寝息を立てていた。

本格的にサボる様だね？

「それじゃ、私も寝ようかな？
……寝てるよね？」

もう一度彼の方を見て寝ているのを確認し、そっと肩に頭を乗せて目を閉じた。

こんなに近くで人の温もりを感じたのは……本当に久し振りだな。

小さな頃は4人で一緒に寝ていたっけ？

またお父さん達のことを思い出したけど、今度は悲しくなることは無くて、

「ぽかぽかする」

暖かくなった。

4月20日 水曜日 3

『あんなんかがいるから!』

『あんたの所為で! あたしは!』

『お前なんか生まれてこなければよかったんだ!』

全くだ。

俺なんか生まれてこなければよかった。

生まれたとして俺としてでは無く、別の誰かとしての意思を持って生まれてくれればよかった。

それにしても、久し振りだ・・・家族の声を聞いたのは。

すっかり忘れていたかと思っていたが、以外と覚えているもんだな。

そう言えば夢は記憶を整理するために見る物だって、どこかで聞いたことがあったな。

今回の場合それは当て嵌まるだろう。

「もう6限が始まっているな」

携帯を取り出して時間を確認すると、既に6限が始まっていた。結構寝ていたみたいだ。

それは別にどうでもいいとして、

「くう〜・・・くう〜・・・」

こいつは何をしているんだ？

隣では彼女が俺の肩に頭を乗せて寝ていた。

『ほら、今日は　　の好きな唐揚げよ？』

『ホント！？やったー！』

『　　は本当に母さんの唐揚げが好きなんだな？』

『うん！』

『太るわよ？』

『む、大丈夫だもん！ちゃんと体動かしてるし！』

お母さん、お父さん、お姉ちゃん・・・。

みんながいなくなつて、私はずっと悲しかったけど、今だけは悲しくないよ？

だから、心配しないでください。

今だけは・・・本当に悲しくないから。

それどころかとっても暖かいから。

「・・・お父さん・・・お母さん・・・お姉ちゃん・・・」

「起きたか？」

「え？あ、ああ・・・」

そっだ、私、彼の肩を借りて寝てたんだっけ？

彼女は家族を求めるように、言葉を発した。

多分彼女も家族の夢を見ていたのだろう。
だが、呼ぶ声が優しい響きをしていたことから、俺が見たような夢
ではなく、良い夢だったのだろう。

「さて・・・俺はもう行くからな？」

立ち上がって伸びをしてから彼女に言つと、

「行くつて・・・どこにだ？」

と聞いてきた。

「適当にぶらつく。あんたは勝手にしな」

それだけ言つて俺は小腹が減つたから食堂へと向かった。

コッペパンでいいか。

あれくらいなら我慢できるし・・・。

少し歩いていると、後から足音が聞こえた。

まあ、彼女だろうな？

勝手にしろと言つたのは俺だから特に何も言わない。

「なあ、どこに向かっているんだ？」

「食堂」

「こんな時間に開いているのか？」

「基本どの時間でも開いてるよ」

「そうなのか？便利だな」

さつき寝ていた所から食堂までの道にある教室は殆どが空き教室で、
部室として使われている為この時間は誰もいないから、こつこつして話

していても問題ない。

「君は部活には入っていないのか？」

「それを今更聞くのか？いつも何もせずに帰ってるだろ」

「そう言えばそうだな。いつも真っ先に教室を出ている」

彼女は朝は一緒に行こうと俺を呼び出し、放課後になれば俺同様すぐに帰路に着いているから、この質問は今更過ぎる。

「そういうあんたは部活には入らないのか？」

「入ろうと思ってる部活はいくつかあるのだが・・・」

「迷ってるって訳か」

「まあ、そういうことだ」

それから少しして食堂に到着し、彼女は初めて来た食堂を見て少しテンションが上がっていた。

「ここが食堂か」

カウンターに向かうとおばちゃんがいたから、俺は予定通り余っていたコッペパンを買った。

「また、サボってるのかい？」

「精々週に2、3回程度だろ？大体授業なんか足りなかった睡眠時

間を補うもんだからいいんだよ」

「そうかいそうかい。所であっちの子は？あんたの彼女かい？」

おばちゃんは彼女の方を見てそう言った。

彼女は券売機の前で何か悩んでいた。

「んなわけないだろ？」

「それもそうか・・・」

「じゃ」

「毎度あり〜」

それだけ言って彼女の元まで行き何をしているのか聞くと、買うかどうか悩んでいるようだった。

「買えばいいだろ？昼飯も結局食ってないんだし」

「そうなのだが・・・財布は教室にあるのでな？」

「ああ、成る程」

俺はコッペパンの袋を開けて1口囓る。

「（くう〜・・・）う、聞こえたか？／／／」

租借しながら頷くと余計に顔を赤くして俯く彼女。

「ほら?」

「え?なんだ?」

「好きなの買っていていいぞ?1品くらいなら問題ないしな」

「だが・・・わ!とと・・・」

受けとろうとしない彼女に向かって軽く財布を投げると慌ててキャッチする。

彼女はその後何か言おうとしたが、

「いいからさっさとしろ」

と言うと今度は大人しく従い、財布から金を取り出して唐揚げ定食の券を買って、おつりを財布に入れてから俺に返してきた。

「すまない。後で返すよ」

「いい。初端から返してもらおうとは思っていないからな。ほら、さっさと買ってこい?」

「あ、ああ。行ってくる」

カウンターに向かう彼女を見送って俺は適当な席に着きコッペパンをまた囓る。

半分ほど食べた所で彼女が唐揚げ定食を持って俺の正面の席に着いた。

その時彼女は俺の顔を見てすぐに俯かせた。
心なしか顔が赤い気がするが、まあいいか。

彼からお金を借りて買った券を持ってカウンターに向かい、おばあちゃんに券を出すですぐに出してくれて、

「あんだ、あの子の彼女なのかい？」

突然そんなことを聞かれた。

「え！？／＼／＼い、いいえ！違います違います！／＼／＼」

「おや、そうなのかい？あの子が誰かと一緒に、しかも女の子一緒にいる所なんて初めて見たから、装だと思ったんだけどねえ・・・」

お盆を取ろうと伸ばしていた手を体の前で自分でも振りすぎでは無いかと思う位に振る。

何故こんなに慌てているのだろうか？

顔も多分真っ赤になってる。

どうしたんだ、私は？

「そ、それじゃあ！ありがとうございます！／＼」

お盆を取って、一瞬戸惑ったが結局彼の所に向かうことした。

席に着いて彼を見るとおばあちゃん聞かれた言葉を思い出して、また顔に熱が集まった。

堪らず下を向いてしまう。

それから数分間、私は顔を上げることが出来なかった。

「おい、早く食べないと冷めるぞ？」

「・・・／＼」

「おい、聞いているのか？」

「聞いている／＼」

「なら、はやく食べ？もうすぐ6限が終わる」

「何？もうそんな時間か？」

「ああ・・・ほれ」

彼は携帯を取り出して私に見せてきた。

右上に表示されている時間を見ると確かに後10分程で終わる時間になっている。

「ホントだ・・・食べられるかな？」

10弱じゃ、この量は厳しい。

ちゃんと時間を確認しておけば良かった・・・。

仕方ない、詰め込むか。

「おい、大丈夫か？」

「だ、だいじょうぶ・・・だ」

急いで食べたから、味わう暇が全然無かった。

くそ・・・。

「じゃ、すこし休憩したら戻ってこいよ？」

彼はいきなりそう言って席を立った。

「私は道が分からないんだが？」

「・・・あのなあ、もう2週間経つんだぞ？いい加減覚えていてもいいだろ？」

「ここには君に付いてきたし、今日が初めてなんだ。道なんて覚えてない」

「はあ・・・それならさっさとそれ、返してこい。入り口の所で待

「つててやるから」

呆れた様にため息をついて彼は入り口の所に行き壁に寄り掛かった。それから私はお盆を返して彼の所に行こうとしたらまたおばあちゃんに声を掛けられた。

「あの子のこと、よろしくね？」

「……えつと……はい！」

最後にもう一度お礼を言って今度こそ彼の元へと向かった。

4月20日 水曜日 4

教室に戻るとちょうどHRが終わったのか担任が出てきた。

「なんだ、おまえら？仲良くサボりか？」

彼女は謝ったが俺は適当に受け流して教室に入ろうとすると、

「ああ、そつだ。おまえの机にあった弁当、あたしが食ったから」と言ってきた。

「それ、こいつのだから俺は困らん」

「なんだ、そうだったのか？中々美味かったぞ？」

「あ、ありがとうございます」

「じゃあな」

「失礼します」

うちの担任には相変わらず適当だなと思いつつながら教室に入り、ヘッドフォンを付けて曲を流し鞆を腕と腰で挟み、弁当箱を彼女に押しつけて学校を後にした。アパートに向かって歩いていると後から肩を叩かれ、振り向くと思った通り彼女がいた。

「なんだ？」

ヘッドフォンを外しながら聞くと、

「いつも一緒なんだ。今更置いて行かれたくはないぞ？」

ということらしい。

一度ため息をついて俺はまた歩みを再開する。

彼女は俺の隣を歩き始めた。

「別に置いて行っているつもりはないんだが？約束をしている訳でもないだろう？」

「それを言われると何も返せないが・・・かれこれ2週間は一緒に登下校をしているんだ。

誘ってくれてもいいんじゃないか？」

「誘うも何もな・・・朝はいつもあなたの方から来るし、今だってあなたの方から来たじゃないか？」

「う・・・それもそうなのだがな？」

たまには誘って欲しいと思うものなんだ！」

「んなこと言われてもな・・・」

「大体いつも1人で寂しいとは思わないのか？」

寂しいねえ・・・最期にそう感じたのはいつだったか？

ここ数年は色々なことを感じなくなっている気がするな・・・いや、

実際そうなんだろうな？

・・・ならば、俺は今彼女と共にいる時間をどう感じているのだろうか。

私が寂しいと思わないのか聞くと彼は何か考え込んだ。

考えながらもちゃんとアパートに向かって進む彼はある意味器用なのかもしれない。

確かにここは歩道で車などが突っ込んで来たりしない限りは安全だろうけど、そう言う所では尚のこと周りには気を配っておかないと・・・。

「まあ、いいか」

「ん？」

どうやら考えごとは終わったみたいだ。

すると彼は私が予想していなかったことを言った。

「あんだ、今日俺の部屋に来るか？」

「・・・はい？」

え、どういうこと？

本当に訳が分からない・・・どうして急にそんなことを？

もしかしてさっき私が言ったことを？

え・・・でも、そんな急に言われても！

「別に勝手にしてくれていいぞ？来たくないなら来なくていいし、来たいなら来れば良い。

一応鍵は開けとくよ。

じゃ、俺はちよっと用事あるから」

彼はそう言っただけに行っただ。

「え・・・？あ、ちよっと！」

呼び止めても彼はヘッドフォンを付けていて聞こえていないみたいだ。

どうしたらいいんだろう？

今までこんなこと無かったから本当にどうしたらいいのかわからない。

友達の・・・いや、彼に友達とされているかどうかも分からないけど・・・どうしたらいいのさー！

「ああ！もう！待ってくれ！」

私は彼の後を追った。

そろそろ材料が尽きるから近くのスーパーで材料を買い足そうと思
いたった今、到着した。

今日は何を作るかな？

と言ってもレパートリーも全く無いしな・・・さて、どうしたもの
か？

いつそ適当に野菜を炒めてみるか？

なんか色々中和やらなんやら起こって逆に美味しい物ができるかも知
れん。

「よし、適当に炒めよう」

「私が作りましょうか？」

突然聞こえた声に振り向けばそこには同じアパートに住んでいる女
の子がいた。

「お前か。久しぶりだな？」

「はい、お久しぶりです。お兄さん」

髪は青く肩もとまでのショートヘア。

目は黒。

背は彼女よりも更に頭半分ほど小さい。

中学3年生。

そしてなぜか俺のことを「お兄さん」と呼ぶ。
だから俺も「妹」と呼ぶ。

呼び方なんてどうでもいいから俺は気にしていないが・・・一応名前
前は知っているはずなんだがな。

「珍しいな？お前が外に出るなんて」

「人を引き込みりみたいに言わないでくれませんか？」

「あゝはいはい。悪かった」

女の子は「適当じゃないですか」と頬を膨らませながら材料を勝手に籠に入れていった。

どうやら本当に作るつもりみたいだ。

「それじゃ行きましようか？」

「ん、おお」

籠を持ってレジに行き会計（俺もち）を済ませて妹外に出ると、息を切らした彼女がいた。

「何してんだ？あんだ」

「知り合いですか？」

「ああ、クラスメイトだ。んで、俺らと同じアパートに住んでる」

私がアパートに着くとほぼ同時に彼は出てきた。
隣には私よりも小さい少女がいる。

誰だろう？

「それで、何してんだ？」

「あ……えっと、とりあえず追い掛けてきたんだけど」

「そうか。取り合えず帰ろうぜ？」

「あ、ああ」

「はい」

彼はさつきと同じように先に行ってしまい私と少女はを挟む様に
て歩き始めた。

その途中、少女とは簡単な自己紹介をしたが、2人がお互いを「お
兄さん」「妹」と呼んでいるのに驚いた。
だって彼は家族はいないって言っていたから。

聞こえなくとも思ったけど、聞けなかった。

理由は分からないけど、怖かったんだ。

「あの」

「え？」

少女に呼ばれて横を見る。

彼は先にいてまたヘッドフォンを付けている。

「何？」

「お兄さんとはどういう関係なんですか？」

「え　？」

関係？

彼と私はただ席が隣なだけのクラスメイト。

初めて学校で話したのが彼。

初めてサボった時も一緒にいたのは彼。

初めて食堂へ行った時も一緒にいたのは彼。

登下校を一緒にしているのも彼。

「あ」

思い出して見ると、いつも彼と一緒にだ。

でも、だからって何か関係があるのかと言われれば……。

「私も分からない・・・かな？」

としか言えない。

「分からない？」

「うん。確かに学校で関わるのが一番多いのは彼だけど・・・だからって何か関係がある訳でもない。だから分からない」

「・・・そうですか。よかった」

「・・・もしかして、君は彼のことが好きなのかい？」

私が聞くと少女はボンとでも音が出たのではないか、と言うほどの勢いで顔が真っ赤になった。

それからあたふたして色々言っている。

もうそれだけで好きだと言っているようなものだ。

そんな少女を見て私は考える。

今日、食堂でおばあちゃんに彼氏なのかと聞かれた後、私は彼の顔をまともに見ることが出来なかったのはどうしてなのか、と。

あの時、自分でも分かるほど顔に熱が集まっていた。

もしかしたら気付かれていたかも知れない。

でも、なぜそうなったのかが分からない。

もしかして私も彼に

「おい、お前らどこまで行く気だ？」

「「え？」」

彼の声によって私と未だ隣であたふたしていた少女は現実に引き戻された。

見てみるとアパートをとつくに通過している。

まさか、気付かないほど深く考え込んでいたとは……。

その後少女と慌ててアパートの前まで戻り、私たちはそれぞれの部屋に入って行った。

「まあ、気にしてもしょうが無いな。いつか分かる時が来るだろう」

彼のことも、今日感じた気持ちの正体も。

4月20日 水曜日 5

「では、こちらの方をお願いしますね？」

「ああ、任せてくれ」

何をしてるんだろっな？

こいつらは・・・？

部屋で寛ぎ、そろそろ7時になるつかと言う時に彼女と妹が訪ねてきて晩飯を作ると言い始めた。

確かに彼女には来てもいいとは言ったが、飯を頼んだ覚えはないんだがな・・・作ってくれることに文句はないが。

俺が肉類が苦手なことを知っている2人はちゃんと、野菜中心でメニューを組んでくれているからな。

そこまでされて文句は言えないだろう。

手伝おうと思って声を掛けたが、

「君は寛いでいてくれ」

「お兄さんはゆっくりしててください」

と同じようなことを言われて、結局テレビを点けているが、おもしろい番組は何もない。

ベッドに横になって何となく天井を見上げる。

ま、何も無いよな？

一体何年ここにいるんだと自分に問いたくなった。

何かが変わる訳でも無いってのに……。

……彼女はいつからこのアパートにいたんだ？

不意にそう思った。

なぜだろうか？

「おーい、出来たぞー！」

ベッドの所まで知らせに来た彼女の声によって思考は打ち消される。

「ああ」

「そのまま寝てしまっくんじやないかと思ったぞ？」

「まだ眠くねえって……ほら、準備するぞ？」

「それは、こちらのセリフなのだが……」

妹の元へと向かうと、皿に盛りつけていた所だった。

「美味そうだな？」

「えへへ〜・・・たくさん食べてくださいね？」

「ああ」

取り皿を出して机に並べていき、妹が持ってきた料理を中央に置いた。

それから彼女がコップとお茶を持ってきてから、それぞれに注いだ。

いただきます、と妹と彼女が言って俺は手を合わせるだけ。

そしたら彼女に怒られた。

ちゃんと食材に感謝の意を込めていただきますと言いなさい、と。

小さい声でいただきますと言えば、

「うむ」

となぜか胸を張る彼女。

それはスルーして料理に箸を付けて口に運ぶ。

「む・・・美味しい」

「本当か!？」

彼女が大声を上げて聞いてきた。

「ああ。なんだ、あんたが作ったのか？」

「ああ！君が脂っこい物は苦手だと言うのでな？私なりに考えてみたのだ！」

「確かに美味しいですね・・・ちょっと悔しいです」

「どうしてだ？お前の飯だつて美味しいぞ？」

これはお世辞でも何でも無い。

實際妹の作る飯は美味しい物ばかりで、くじで例えれば当たりしか無いと言った感じだ。

なぜくじで例えたかは聞かないでくれると助かる。

「え、ホントですか？」

「嘘はいわねえよ。言っても意味ないしな」

「確かに・・・お兄さんが嘘ついたことってないですよね？」

「ほお、それはすごいな？人間17年も生きていれば、必ず嘘はつくと思うが？」

「嘘をつくような間柄になったやつがいなくてただ・・・中学くらいから誰とも関わろうとしてこなかったからな。だから、はつきり言って、今の自分が信じられない。

あんたとはまだ、会って2週間しか経ってないのにこうして一緒に飯を食ってるし、お前とは最初から気が合っていたしな・・・」

本当にどうしてなのか？

これまた本当に分からない。

2人ともあつちから近づいて来た。

妹は隣の人に挨拶といった感じだったのだろうが、それ以降関わってることが多くなった。

彼女に至っては、転校してきた次の週から弁当は俺と食うようになつてた。

俺なんかと関わっても楽しくないだろうに・・・それなら、部活を見学でもしているほうが余程有意義な時間となると思うが。

妹にしたってそうだ。

俺に飯を作ろうとなんてせずに、自分の時間を使えばいい。

「なあ」

「ん・・・どうした？」

「なんですか？」

「どうして俺なんかに関わるんだ？」

彼は突然そう言った。

だが・・・『なんか』？

彼は自分をそう言ったのか？

「妹は確かに知り合って長いが、それでも俺なんかよりも自分の時間に使ったほうがいいだろう？」

また。

確かに言っている。

今度はしっかりと聞き取れた。

「そんなの、私がそうしたいからです」

少女ははっきりとそう言った。

彼は、単に理由を知りたかっただけなのか、そうか、とだけ答えて今度は私の方を向いて同じことを尋ねてきた。

その際、また、『なんか』とつけて・・・。

「私も同じだ・・・私がそうしたいからそうしている」

「そうか」

「今度は私が聞いてもいいか？」

「なんだ？」

「何故自分のことを『なんか』などと言う？
まるで自分は『生まれてくる必要がなかった』とでも言っている様に聞こえるか？」

私にはそう聞こえた。

少なくとも私は自分を指すときに『なんか』とはつけない。
自分のことが好きなのだから、そんなものをつける訳がない。

なのに彼は、さっきから何度も自分にそれをつけている。

だから、その理由を知りたかった。

「当たり前だ。俺は生まれてこなくて良かった。あいつらにも言われたことだし、俺自身そう思っているからな」

「そんな！」

少女が叫んだ。

ショックだったのだろう。

好いている相手が、自分は生まれ来なくてよかったと言っているのだから。

しかもそれが当たり前だとも言うように……。

「あいつらとは誰のことだ？」

「ん？家族だった奴らのことだが？」

「『だった』?」

「ああ、俺は捨てられたからな・・・それで、近所だったこの大
家が部屋を使ってくれて良いと言ってくれたから、世話になってい
るんだ」

言葉が出なかった。

自分の子どもにそんなことを言う親がいたなんて・・・。

それに、少女の反応をみるにどうやら、この子もしなかったらしい。

「・・・悲しくないんですか?」

少女が聞いたのは、今日私が聞いたことでもある。

彼は私に答えたことと同じことを答えた。

家族がいないことに対して何も思っていない、と。

「私は寂しいぞ?家族がいなくて・・・」

ぽつりと彼女がそう呟いた。

「え？」

妹が突然のことに驚いて声を上げる。
俺もなんとなく彼女の方を見るが、顔を俯かせているから表情は分からない。

「お父さんが・・・お母さんが・・・お姉ちゃんがいなくなった時、私は寂しかった」

「それがなんだ？」

俺が言うと彼女は顔を上げて俺を睨んできた。
そういえば彼女に睨まれたのは初めてだな。

「家族がいないのに、どうして君は悲しくないと言える？本当は悲しいんじゃないのか？」

「想像するのは勝手だが、あんたにも言っただろう？家族がいないことに対して、俺は何も思っていない」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

互いに無言が続いたが、しばらくして妹が飯を再開しようと言い出し、そういえば途中だったなと思い出して俺は飯を再開した。
彼女は俺を睨みながらも器用に、飯を食っており、妹は気まずそうに飯を食べていた。

食べ終わってから2人は帰り、片付けは俺が行っている。

「明日の弁当はどうするかな・・・？」

いつも通りでいいか。

レパートリーも大してないしな。

「明日の授業はいつサボろうか・・・」

なんてことを考えながら俺は食器を片付けて、その後の風呂に入り寝た。

『俺は生まれてこなくてよかった』

「そんな訳がないだろう？」

浴槽に顔を半分ほど浸けてぶくぶくと鳴らす。

頭の中ではさっきの彼の言葉渦巻いている。

頼むからそんなことを言わないで欲しい。

私が悲しくなるじゃないか。

彼の言った通りたった2週間だが、楽しかった。
彼と過ごす時間は楽しかった。

今日だってそうだ。

一緒にサボったこと、一緒に食堂でご飯を食べたこと。
一緒に帰ったこと。

気付けば転校してきて、いつも彼と一緒にだった。

朝も昼も夕方も・・・近くにはいつも彼がいた。

「・・・・・・・・」

ザバ・・・と湯船が音を立てる。

脱衣所で体を拭いてパジャマを着て、タオルを首に巻いてベッドに腰掛ける。

寝転がって彼の部屋の方を向けばそこには壁があるわけで、でもこれのベッドは部屋の右側。

つまり、この壁のすぐ向こうにある。

もう、寝ているのだろうか？

「君がいたから、楽しかったんだ」

壁に手を当てながらそっと、呟いた。

そっぴえば名前を聞いてない。

2週間も経つのに、どうしてそんなことに気付かなかったんだろうか？

いつも心の中でも彼のことを彼として言っていないのに……。

「君にも名前を呼ばれていない……っ！」

一瞬胸が痛くなった。

どうしてだろうか？

名前を呼んで欲しいから？

君の口から。

君の声で……。

『

「っ／／／」

想像したら一気に顔が熱くなった。

想像だけでこんなになっちゃってしまったら、もし本当に呼ばれたら呼吸が出来なくなってしまうんじゃないだろうか？

現に今も心臓がばくばく言っている。

「あした……頼んだら、呼んでくれるかな？／／／」

今日は眠れるだろうか？

4月21日 木曜日 1

頭が痛え……。

風邪を引いたとかじゃなくて物理的なことが原因で。

たく、出席簿の、しかも角で叩きやがって……まあ、遅刻した俺が悪いんだが。

余裕があると思って二度寝したのがいけなかったか。

にしても。

「まだ痛え……どんだけの力で殴ったんだよ、あの野郎」

女だが。

「遅刻した君が悪いのだろうか？甘んじて受けるべきだ」

彼女は隣で呆れている。

ま、それは無視だ。

問題は、今日の昼飯をどうするか？

朝は二度寝してしまつて時間なんか無かつたから作れなかつたし、かといってまたコッペパンを食うのもな……金だつてあまり無い。いや、コッペパンくらい買うことは出来るが出来るだけ使いたくないしな。

どうすっかな……。

まあ、寝て考えるか。

んな器用なことできねえぞ、俺。

「・・・・・・・・」

痛みで少しおかしくなったか？

保健室で氷もらって来るか。

俺は席を立って教室を出て行こうとしたが、彼女に止められた。

「おい、どこに行くんだ？もう授業が始まるぞ？」

「保健室だよ。痛くて頭が正常に働かないんだ。ついでにサボるか
ら。じゃ」

「は？おい、君！」

無視無視。

保健室に着くと同時に2限開始のチャイムが鳴った。

ノックもなしに中に入ると机にむかって仕事をしている保険医がいる。

保険医は扉がスライドする音に気付きこちらを振り向く。

「あら？もう授業は始まっているわよ？」

髪は黒のロング。

瞳も黒。

背は今は俺よりはでかい。

「分かってるよ。氷もらったすぐにサボる」

「そう。自由に取りなさい？」

「ああ」

袋の中に氷を入れて布に包んで頭の頂上部に当てる。

これで少しはましになるといいがな。

あいつ見た目細いくせにやたら力があるし。

氷を当てながらベッドに向かって倒れ込む。

「あゝ・・・あのアマ。あんた、あいつとは幼なじみなんだろう？なんとか出来ないのか？」

「できないことは無いが、それだと君がここにこなくなってしまうでしょ？」

「なんだよ？来た方がいいのか？」

「ええ。少なくとも、わたしは君が気に入っているからね？そういうえば、君が来たのは久し振りじゃない？」

確かにそうだな。

遅刻しなければここに来ることはまず無いし、普段からそんなに怪我をする訳でもないからな。

怪我をしたいとも思わないが……。

「最近、何か楽しいことでもあった？」

「なんだ、いきなり？」

「涼子から聞いたのよ。最近、君が転校してきた子とよく一緒にいるってね」

涼子というのは担任の名前だ。
ちなみに保険医の名前は美奈。

小学校からの腐れ縁らしい。

2人とも今年で24になるが独身で、男性教師からはしょっちゅうアプローチを受けているそうだ。
全部断っているみたいだが……。

教師からだけでなく、生徒からも人気がある。

ここに来たいが為にわざと怪我をする奴や、叩かれたくてわざと遅刻する奴……。
実際今日も叩かれた俺を見て、恨めそうな視線を送ってくる奴がいたからな。

どちらも美人だが、そこまでする必要があるのか？

「単に隣っただけだぞ？」

「でも、ご飯と一緒に食べたり、一緒にサボったりするくらいの仲ではあるんでしょ？」

「なんでそこまで知ってるんだ？」

「涼子情報」

人差し指をぴし、と俺に向けながら言ってくる。

「・・・暇なのか？」

「違うわ、超暇なの。君が毎日来てくれれば良いんだけどね？」

「別にいいが？」

俺が言うときよんとする美奈。

なんか前に名字に先生を付けて呼んだら、名前で呼べって言われた。初めて来たのは1年の2学期だから、丁度1年前くらいか・・・その時には既に俺のことを知っていたみたいだ。

「ま、あいつの授業の時はここでサボる。それでもいいならだがな？」

「いいよ！むしろ、お願いしたいくらい！」

何がそんなに嬉しいんだか・・・。

確か今日は4限があいつの授業だったな。

教科は現代文。

うん、どうせ寝るな。

「とりあえず、3限が終わったらまた来るよ。今は寝させてくれると助かる」

「うん！おやすみ！」

眠る寸前、名前を呼ばれた気がした。

4月21日 木曜日 2

2限が終わって保健室に行くとき、彼は寝ていた。

痛い部分を冷やしていたのか、枕の横には氷が入っていたであろう袋。

保険医は何か仕事があるのか今はいない。

つまり・・・2人きり。

だめだ、意識すると恥ずかしくなる。

とりあえず起こそう。

「おい、君。とっくに2限は終わってるぞ?」

体を揺すってしばらく彼は目を覚ました。

「・・・あんたか。・・・美奈は・・・いないな。紙に書いておくか」

みな?

誰だろう?

彼は机まで行って適当な紙に何か書いて、見つけやすい位置に置いた。

それからさっさと保健室を出て行く。

「あゝ・・・ねみい・・・」

「さっきまで寝ていたじゃないか」

「それでも眠いんだよ」

「それならまだ寝ていきなよ？」

突然後か声が聞こえて振り向くと綺麗な女性が立っていた。

この人がみなだろうか？

綺麗な黒髪・・・羨ましい。

「そうしたのは山々だが・・・」

「させないからな？」

「だそうだ」

「それは残念。その子は？」

みな先生は私の方を見ながら聞いてきた。

「ほら、さっきあんたが言ってたろ？転校生の・・・そういやあんなの名前知らないな。
なんて言うんだ？」

「え？言ったら呼んでくれるのか!？」

「当たり前だろ？それで、名前は？」

「あ・・・真奈。真実の『真』に奈良の『奈』で真奈」

「そうか。んじゃ、行くぞ、真奈」

「っ／／／／」

呼ばれた途端心臓が跳ねた。

堪らず顔を俯かせてしまった。

想像してたのと全然違う。

心臓がどうにかなりそうだ。

顔も絶対赤くなってる。

「おい、どうした？」

ずい、と彼が顔を覗き込んできた。

「きゃあああああ！！／／／／」

ドンー！

「ぐおー！」

私はその場から逃げ出すように走り出した。

無理無理無理！

今は絶対彼の顔を見れない。

恥ずかしい！

教室に着いて鞆を引っ掴みまたすぐに出て行く。

そのまま走ってアパートまで帰った。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

玄関にへたり込む。

あんな・・・あんなに顔を近づけられたら直視なんて出来る訳がない。

ただでさえ、名前を呼ばれて心臓が可笑しくなりそうなのに。

「まだ・・・ドキドキしてる／＼」

走ったって言うのも勿論あるけど、それ以上に名前を呼ばれたことによる動悸の方が大きい。

胸に手を当てれば、本当に破裂でもするんじゃないかってくらい暴れてる。

「・・・・・・・・」

ゆっくり深呼吸して、やっと少し落ち着いた。

「ぶっ・・・」

どうしよう。

勢いで帰って来ちゃったけど、今からまた行ってもとっくに授業は始まっているし。

でも何も言わず帰って来ちゃったし、せめて先生には言わないと駄目だろう。

「はあ・・・すぐに出れば丁度終わる位かな？」

制服を整えて私はまた学校へ向かった。

学校に着いて教室に向かうと先生を見つけ、それと同時にチャイムが鳴った。

「先生」

「ん？おお、遠藤か。どうした？」

「すみません。3限目の授業、勝手にサボってしまいました」

「なんだ、またあいつか？」

「っ／／／」

また心臓が跳ねた。

「え、えつと／／／」

「どうした？顔が赤いぞ？」

先生はニヤニヤしながら言ってきた。
絶対にからかってる。

「まあ、いい。あいつはまだ保健室だから、どうせ授業は欠課だ」

「え？どうしてですか？」

「さつき、美奈から連絡があつてな？今は気絶中みたいだ・・・お前何かしたのか？」

「いえ、何も・・・あ！」

「したんだな？」

きつと去り際にどついたことだ。

力加減が出来なかったから結構なダメージがあつても可笑しくない。
まさか、気絶する程なんて・・・

「嫌われたかな？」

不安になる。

「・・・お前、あいつのこと好きなのか？」

先生が普段とは違う真剣な顔をして聞いてきた。

「え？」

好きなのか？と聞かれれば、

「分かりません」

としか言えない。

先生はまだ真剣な顔だ。

「本当に分からないんです。彼のことをどう思っているのか・・・」

「そうか・・・まあ、今はそれでもいいだろう。だがあいつを狙うなら気を付けろ？」

「ライバルは多いぞ？」

「え、彼ってそんなに人気があるんですか？」

普段の様子を見ても全然そんな風には見えないけど・・・誰とも話してないし。

私の場合は私から話しかけてるから、話してくれてるだけで・・・

そういえば今朝、先生が彼の頭を出席簿で叩いた時、普段あまり笑わない先生が笑っていた気がした。

さっきのみな先生も、普段がどうなのかは分からないけど、彼をただの生徒として見ている様な気はしなかったな・・・。

「もしかして、先生・・・」

「ほら、早く教室に入れ。欠課扱いにするぞ？」

「あ、入ります！」

流石に連続で欠課扱いされる訳にはいかない。

昨日だって午後は2限続けてサボってしまったんだから。

私は急ぎ教室に戻った。

「こういつ時、教師ってのは大変だよ・・・」

入る寸前聞こえたこの言葉がどういう意味だったのかわからないまま。

4月21日 木曜日 3

真奈にどつかれて気を失った俺は、恐らく4限目終了の鐘であろう音で目が覚めた。

だが、出来れば覚めたくなかった……。

「すう……すう……」

隣で寝ている美奈を見てそう思った。

が、まあいい。

それよりも飯だな……どうするか。

「腹減った……」

「それなら、わたしの弁当を分けてあげようか？」

「……いつから起きてた？」

「ずっと起きてた。さっきまでの演技だよ？」

「はあ……」

無駄にそういう所はすごいんだよな……もっと別の所で別のすさを発揮して欲しいが。
言っても無駄か。

にしても、真奈の奴……見た目の割にかなり力があるな。

気を抜いてたとはいえ、まさか気絶するとは。

その後結局美奈に弁当を分けてもらった。

「うま」

「本当!？」

「ああ、良い意味で予想外だ。料理得意なんだな?」

「ええ。伊達に一人暮らしじゃないわよ?どう、お嫁さんに欲しくない?」

「お前、去年からそれ言ってるよな?そんなに良い相手が見つからないのか?」

前にも言ったと思うが、こいつと涼子(こっちからも美奈と同様のことを言われた)はモテる。

何度か朝寝ぼけてヘッドフォンを忘れて学校に来た時があったが、その時にクラス内で生徒達が話していた話題の中にこの2人のことがあった。

なんでも2日に1回は男の教師から店に誘われたり、告白されたりしているそうだ。

それだけモテるのに、その全てを断っていることも有名(?)だ。

「美人なんだからその気になれ「ふえ!?!」・・・ん?」

変な声が出て、美奈の方を見ると顔が真っ赤になっていた。

「どうした？」

「……え……えつと／／／」

「おい、大丈夫か？熱でもあるのか？」

弁当を置いて美奈の額に自分の額を当てて熱を計る。

「ひゃ！／／／」

「あ、こら！計れないだろ？」

離れようとした美奈の背中に手を回して逃げられないようにする。

「うあ／／／／／」

今度は大人しくなったからちゃんと熱を計ることができた。

「……熱は無いが……本当に大丈夫か？」

「……う……うん／／／」

やっぱりまだ顔が赤いな。

「熱は無いが一応休んでおけ？保険医が倒れたりしたら、示しがつかん」

立ち上がり美奈をなんとか抱き上げる。

「あ、や！ちょっと！いきなり／／／／」

「暴れるなって・・・ベッドに運ぶだけだ」

それでも暴れるから、ほんの数歩で着くはずのベッドまで2分ほど掛かった。

白衣を脱ぐように言って布団を被せ、隣に椅子を持ってきてそこで弁当を食う。

「・・・・・・・・」

他の奴が今の光景を見たらどう思うんだろうな？

明らかにおかしな構図だろうということは何となく分かる。

保健室で弁当を食べるだけでも、少し可笑しいのに保険医が寝ているんだからな・・・。

ま、気にしても仕方ないか。

弁当を半分ほど食べて俺は卵焼きを箸で掴み、美奈の口元まで持っていた。

「・・・なに？」

「分からないか？口開ける」

「・・・・・・・・ええ！！／／／／／」

ボン！音を立てて顔を真っ赤にする美奈。
今本当に音が聞こえたぞ・・・すげえな。

「ほら？」

「……あゝん／＼／＼」

そう言いながらゆっくりと小さく口を開けて、卵焼きが口に入ろうとした瞬間、

「ぱく」

誰かが食べた。

「もぐもぐ……んく……ふう、相変わらず美奈の飯は美味しいな？」

「涼子か。何しに来たんだ？お前、元気だろ？」

俺がそう言つと、

「あ痛」

どこから出したのか出席簿で叩かれた。しかもまた角で。

「仮にも教師を呼び捨てに、しかもお前とは何だ？」

「そう呼べって言ったのはお前だろ？おっと、殴るなよ？」

「ち」

「舌打ちすんな」

仮にも教師だろ。

「ちょっと、涼子？もうちょっとだったのにどうして邪魔するの？」

「いやな？お前の飯は美味いから食いたくなって、来てみたら丁度こいつが差し出していたから」

「食ったのかよ」

食い意地張ってんな・・・。

その後、美奈はベッドに座り俺が渡した弁当を食べていた。

1口目を食べた時、少ししてまた顔が赤くなっていたから、やはり熱があるのかと計ろうとしたらすごい勢いで大丈夫と言われた。

涼子は理由が分かっていたみたいで最初はニヤニヤしていたが、美奈が自分と俺は額をくっつけ合ったと言うと、途端に悔しそうな顔をし出した。

それから俺を見て、

「私にも同じ事をしろ！」

等と言ってきた。

「お前熱なんか無いだろ？」

「今はあるんだ！」

「どづいつことだよ？たく、俺は戻るからな？」

後ろで何か言っている2人を無視して保健室を出ると、なにか用事があったのかここに来た真奈と遭遇した。

「どづかしたのか？」

「君を迎えに来たんだ。・・・その、さっきはすまなかつた。突き飛ばしてしまつて」

真奈はそう言つて頭を下げてきたが、俺は気にしてないと言い教室へ戻つた。

どつやら、真奈も本当に俺を迎えに来ただけのようので隣を歩き始めた。

教室に着き机に座つて突つ伏す。

「おい、さっきまで寝ていたのにまだ寝るのか？」

「ちよつと疲れることがあつてな・・・今は寝ないが、授業中は寝る。起こさないでくれよ？」

「どづせ、起きないじゃないか？今まで何度私が君を起こそうとしたか・・・」

んなこと言われてもな・・・授業をどう受けようと個人の自由だ。

「そづいや、お前は飯くつたのか？」

「ん？ああ、食べ終わつても君が戻つてこなかつたから迎えに行つ

「ただ」

「そうか・・・」

それから少し話をしてしていると昼休み終了を告げる鐘がなり午後の授業が始まった。

始まって暫くすると空が曇ってきて、雨が降り始めた。

カッ！

と雷が鳴り学校の電気が消えた。

「きゃあ！」

「うお」

真奈が腕に抱きついてきた。

雷が怖いのか、びっくりしたのか・・・まあ、いいか。

すぐに電気も点くだろう。

と思っていたが、それから20分経っても雨は降り続け、雷も鳴り続けた。

「う・・・うう・・・」

俺の腕に抱きついたまま、真奈は震え続けていた。

空いている右手を頭に置いてゆっくり撫でる。

「あ
」

小さく声をもらす真奈。

「大丈夫だ」

「……」

俺がそう言つと、停電の所為で顔はよく見えなかったがこちらを俺を見た真奈が、

「なまえ、教えて？」

と言つてきた。

そつえば俺はまだ名乗つてなかったのか……すっかり忘れていた。

何故このタイミングで聞くのか？と一瞬思ったが、どうでもよかった。

「裏央。『裏』に中央の『央』で裏央だ」

「裏央。やっと……名前を呼べた」

そうやって真奈は、更に強く俺の腕に抱きついてきた。

4月21日 木曜日 4

裏央。

やっと彼の名を呼ぶことが出来た。

不思議なことに彼にくっついてしていると心が安らぐ。

どうしてだろう？

雷は怖いのに、裏央が近くにいるだけで怖くなくなる。
さっきまであんなに怖かったのに。

裏央が私の頭に手を置いて「大丈夫だ」と言ってくれて時、私の心は落ち着いた。

それまで、何も考えることが出来なかったのに……。

彼は名前を言った後、また私の頭を撫でてくれた。

子どもみたいかも知れないけど、嫌な気なんて全然しなくて……
もっと、撫でてもらいたい。

「真奈。そろそろ離れた方が良いぞ？ 明かりが点く」

「え……」

いきなりの発言に思わず声をもらして彼を見る。

「大丈夫だ。どこにも行かない」

「ほんと？」

「本当だ。というか、どこにも行けないだろう？」

「うん」

頷くと顔は暗くて良く見えなかったけど、微笑んだ気がした。

そして、

「……」

「あ……」

また頭を撫でてくれた。

離れて席に着き、少し待つと、パツと明かりが点いた。
隣を見ると裏央は外を見ていた。

「っ！」

どうしてか分からないけど、裏央がどこかに行ってしまったらしい感じがして、声を掛けようとしたら、全校放送が入った。

内容は突然の大雨雷のため今日は、もう放課にするというもの。
ニュースなどを見ても今はまだ軽い方であり、もう暫くするともっと酷くなるそうだ。

そしてその放送が終わったら先生が、じゃあ、終わりと行って私たちが帰ることになった。

「それじゃ、俺は帰るが・・・真奈、お前はどっする？」

「え？帰るが、足がない」

「そうか、それなら心配するな。とりあえず行くぞ？」

裏央はそう言っただけで我先と教室を出て行った。

「あ、待って！」

慌てて後を追って行くと、途中でまた先生と会った。

「おお、お前ら。丁度良かった」

「俺もお前んところに向かった所だ」

「え？何故だ？」

話を聞くと、先生に送ってもらおうということらしい。

私がそんなことをして良いんですか？と聞くと、バレ無ければ大丈夫だと言っただけで、3人で校門に向かった。

「お、来たね？それじゃ、早く乗って？」

「ああ」

近くに停めてあったみな先生の車に乗って、いいのか聞くと、涼子

先生と同じことを言った。

「どうやらこう言うことはこれまでも何度かあったらしい。」

それからアパートまで送ってもらって、私と裏央、涼子先生が降りて、みな先生は駐車場に車を停めて走って戻ってきた。

雨は相当酷くなっていて、駐車場からここまでの距離でもずぶ濡れになってしまっている。

「ま、とりあえずお前はさっさと風呂に入れ。風邪引くぞ?」

「うん、そうするよ・・・うう、寒い・・・早く入ろう?」

「そうだな。真奈、とりあえずお前も入れ。説明するから」

裏央は私が不思議に思っている事を分かっているかの様にそう言っていて、私達は裏央の部屋に入った。

話を聞くと、先生達はこのアパートの同じ部屋に住んでいて、今まで一度も会わなかったのは、そうしないようにしていたから、らしい。

偶にこの部屋に来てはみな先生と涼子先生が食事を作ったり、遊んだりもしているとのこと。

「どうしてこのアパートに住むことにしたんですか?」

「それは・・・」

「いいところが無いか聞かれて、教えたら翌日から住み始めてた」

「・・・先生」

理由が丸わかりだ。

みな先生は今シャワーを浴びてるから、聞けないけど、多分同じ理由だと思う。

それから暫くは上がって来たみな先生も交えて雑談で時間を潰し、一旦解散となった。

「ふう・・・人気だね？君は・・・」

まさか、先生に恋愛感情を抱かれているなんて。

「でも、ま・・・理由は分からないでもないかな？」

私も彼に惹かれているのは事実だし。

「これからどうなるのかな？」

と期待に胸を膨らませていると、カッ！とまた雷が鳴った。

「きゃー！」

私は堪らずその場へたり込み、

「・・・裏央・・・」

彼の名を呼んだ。

4月21日 木曜日 5

一旦解散した後、少しの間止まっていた雷が鳴った。
真奈の学校でのあの恐がり様はかなりのものだ・・・一人で大丈夫だろうか？

「と、考える暇があるなら向かうか」

部屋を出て隣の部屋に行き、インターホンを鳴らす。

ピンポンと気の抜ける音が鳴って待っていたが、一向に出てこないから入った。

奥に入り見てみるとベッドに隠れている真奈を見つけた。
盛り上がってるから・・・すぐに分かる。

外が見えないようにする為カーテンは閉まっていた。

やはり怖いのだろう。

ベッドに近づき布団の上から軽く叩く。

「おい、真奈。大丈夫か？」

「・・・りお？」

聞こえた声は震えていた。

「ああ。ほら、出てこい。腐るぞ？」

「いや。雷、怖いもん」

「大丈夫だ。怖いなら俺がいるから」

俺なんかがいても意味は無いが、1人よりは断然いいだろう。

1人だと気を紛らわすことができないからな・・・休みの日なんかはかなり暇だった。

妹も休みの日だけは活発になるし。

しかも決まって月曜の朝に帰ってくる。

まあ、今はどうでもいいか。

「ほんとうに？どこにもいかない？」

布団から顔を少しだけ出して涙目で尋ねてくる真奈。

言葉からも予想できたが、普段は無理にあの言葉遣いなのかも知れない。

今は子どもみたいになっているし。

今の真奈はたぶん家族にだけ見せる真奈なんだろうな・・・。

「行かないさ。だから出て（ピシヤアアン！）「きゃあ！」「あ、た
く・・・」

途中で雷が鳴りまた引っ込む真奈。

このまま会話するのも面倒だから布団を剥ぎ取った。

「あーやだ！返して！」

「・・・怖くねえって。深呼吸しろ」

布団を取り替えそうと手を伸ばす真奈にそう言いつつ、

「え？うん・・・すうく・・・はあく・・・（カツ！）っ！」

深呼吸してまた途中で雷が鳴った。

その所為でベッドに蹲る真奈。

いい加減うぜえな・・・雷。

「う・・・うう・・・おとうさぁん・・・おかあ、さん・・・お
ねえちゃん・・・怖いよぉ・・・」

「・・・・・・」

震える声で家族を呼ぶ真奈。

その姿は本当に子どもの様で、何故だか守らなければと思った。

頭から布団を掛けて胸の前で合わせ、顔だけが出るようにする。

「え？」

「そのまま後ろ向け」

「・・・どうして？」

「いいから」

ゆっくりと後ろを向く真奈。

そして、後からそっと抱きしめた。

俺はどうしてこんなことをしたのだろう？と思ったが、これで真奈の気が少しでも紛れるならそれでいい。

「あ・・・りお？」

「嫌かも知れないが、今は俺のことだけ考えてる。少しは気が紛れるだろう？」

「・・・うん」

りおに抱きしめられて、一瞬何が起きたのか分からなかった。

でも、なんとか理解して、りおに自分のことだけ考えろと言われて、私はそれをすんなりと受け入れた。

いやじゃないよ？

言われた通りりおのことを考えて、まだ名前以外ほとんどのことを知らないことに気付いた。

「ねえ、りお」

「なんだ？」

「りおって女の子の好みってあるの？」

「・・・いきなりなんだ？」

問うと少し間があって答えた。

「なんだ？と聞かれたら、りおのことを考えていたからとしか言えない。」

「いいでしょ？どつなの？」

「別にいいが・・・今まで誰かを好きになっただことなんて無いからな・・・好み、というより理想と言った方がいいかも知れないが・・・」

「うん」

「多分、この先好きになった奴が俺の理想なのかも知れない」

「結局、分からないってこと？」

「ああ」

「そっか・・・じゃあ、好きなことは？」

「寝ること」

「今までで一番楽しかったことは？」

「・・・覚えてねえな・・・お前は？」

次はりおから質問された。

「家族で海に行ったこと・・・りお？」

家族と言ったら回されているりおの腕がぴくりと動いた。

「なんでもない。それで？」

「うん。スイカ割りとか砂でお城を造ったりとか・・・かき氷を食べるお姉ちゃんと一緒に頭がキーンってなったりね？それでもまだ食べるお姉ちゃんを見て、お父さんお母さんが優しく笑ってた。昔のことだから、細かい所は覚えてないけど・・・一番楽しかったことって言われたら、真っ先にこれが出てくる」

「そっか・・・仲、いいんだな？」

「うん。本当に楽しかったんだ・・・でも、もう会えない」

「・・・」

りおは黙った。

何か言つて欲しかったけど、我が儘だよな？

「すまないが、俺は気の利いたことなんて言えない。だが、今お前は1人じゃないだろ？」

「っ！」

そっだ……。

「少なくとも、今この瞬間は俺と一緒にいる」

そっだ……今はりおがすぐ近くにいます。

今だけじゃない。

こっちに来てからずっとりおは近くにいた。

今日も学校で雷が鳴った時だって、優しく頭を撫でてくれた。

それだけで安心できた。

「だから今は何も心配せずにゆっくり眠るといい。近くにいますから」

「……うん」

私はその後、ベッドに横になった。りおが布団をそっと掛けてくれて、椅子を持ってきて近くに腰掛けた。

「りお・・・手、にぎってもいい？」

「・・・ああ」

「ありがとう」

手を出すと優しくその手を取ってくれた。
それだけですごく安心する。

外はまだ雷も鳴ってるのに、今は怖くない。

「側にいてね？りお」

「ああ」

りおはそう言って微笑んだ。

「あ」

「ん？どうした？」

「りおの笑顔って・・・綺麗」

「は？」

間の抜けた声をだして私を見るりお。

「えへへ・・・雷なんて嫌いだったけど、今日だけは好きかも・・・
おやすみ、りお」

私は目を閉じた。

「ああ、お休み」

りおの優しい声と手の温もりを感じながら。

4月24日 日曜日

あの後、俺の部屋に行った美奈と涼子が俺がいないことに気付き、真奈の部屋に来て色々聞かれたが、とりあえず真奈が起きないように静かにしてもらって、紙をとってもらい空いている方の手で事情を書いていき何とか分かってもらえた。

俺はその日、真奈が手を離してくれなかったから結局ベッドに倒れる様に寝てしまい、翌日目が覚めると真奈に頭を撫でられていた。

意外と悪くなかったな……。

それから、4人で朝飯を食って美奈と涼子は先に来るまで学校に行った。

飯の時に真奈が恵里を誘うと下が、どうせ起きないからと俺が止めた。

学校に行くときに扉越しに声を掛けたが、返ってこなかったしな。

学校ではいつもの様に過ごして、昼飯はまた4人で食った。

保健室で……。

アパートに帰ると恵里がどこか行っていたのか帰ってきた来たところ、そのまま何故か俺の部屋に集まることになり、テレビを見たり雑談したりして過ごし、帰ってきた美奈達も何故か自分達の部屋ではなく俺の部屋に直行してきた。

流石に5人もいると狭く感じた。

晩飯をおれと真奈で作って食べ、その後は各自解散。

真奈が一番遅くまで残っていたから、どうせなら風呂にも入っていけと言ひ、わざわざ着替えを取りに自分の部屋に戻っていった。

意味なくね?と思った。

それから真奈が風呂に入って後に俺も入り、また雑談。

真奈のパジャマは薄い水色に水玉がプリントされているシンプルなデザインの物だったが、似合っていた。

しゃべっている途中、真奈が

「今日はこっちで寝てもいい?」

と聞いてきた。

朝にはいつもの口調になっていたが、この時にはまた前日の様な子どもっぽい響きを持つ声と口調になっていた。

断る理由も特に無かったし、つもりは無かったとは言え俺も真奈の部屋で寝たからな。

それで寝ることになり俺は床で寝ようとしたら真奈と一緒に寝て欲しいと言いだし、断ると何か・・・真奈が泣きそうだと、何とな

く、本当に何となくそう感じて隣に入り一緒に寝た。

翌日起きたら、また頭を撫でられていた。

土曜日は特にすることも無く、私は課題をすませることにした。

余り多くは無かったから1時間ほどで終わり、また暇になったから出かけようと思い、外に出た。

一応、裏央に出かけてくると言つて、本屋へ行き、少し雑誌を立ち読みして適当にぶらぶらと……。

結局飽きが来たからアパートに戻った。

でも、やっぱりすることがないから、暇で……携帯を見て、

「そういえば、裏央って携帯持ってるのかな？」

と呟き、確かめるために隣へ向かい、入れてもらった。

「どうした？」

用件を聞かれたので、

「携帯持ってる？」

と聞いた。

「ん、ああ。持ってるが・・・そういや、メアドとか交換してなかったな？するか？」

「うん！」

その後裏央と電話番号、メアドを交換して、試しに一度よろしくと送り、ちゃんと届いたのを確認して次は裏央からのメールを受け取り確認完了。

次に電話を確認。

「オツケーっと・・・昼飯食っていくか？」

「え、いいの？」

「ああ、といっても野菜炒めだが」

「ううん！嬉しい！」

良いことばかりだったな。

今日は日曜日だけど、昨日同様何もなし……じろじろしてるのもな。

バイトでも探そうかな？

家賃は問題無いけど、もっと自由に使えるお金も欲しいし……近場でどこか探してみようか。

「りおー……いる？」

呼ぶとすぐに出てきた。

「どうした？」

「ちょっと出かけてくるね」

「そうか。俺も出かけるから少し一緒に歩くか？」

「え、でも、方向は？私があっちなんだけど」

「俺もそつちだ。さて、行くか……ちゃんと鍵閉めたか？」

言われた自身が無かったから確かめて、掛かっていなかったからちやんと掛けた。

それから学校の方の道を一緒に歩いて、途中で何をするのか聞くと、

「ちょっとバイトを探そうと思ってな……自由に使える金はやつ

ば、欲しいし。お前は？」

と答えて聞いてきた。

「……裏央と……まったく同じ理由」

「そうなのか？」

「うん。寸分変わらず……どうせなら同じ場所で働く？」

「それができれば一番いいかもな？」

「そうだねえ……」

それから俺たちはアパートと学校の中間くらいにあるファミレス、
『ハッピースマイル』に行き店員にバイトができないか聞いた。

すると運がいいことに4人ほど募集していてまだ1人も埋まってないから、店長と話して許可が貰えれば、明日からでも働いて欲しいとのことだ。

それから店長に会ったが、意外なことに女だった。

「お前ら部活とかしてんのか？」

「していないが？」

「私事です」

「それならOKだ。明日からよろしくな？詳しいことは放課後に話すから終わったらすぐに来てくれ」

「・・・そんな簡単でいいのか？」

「手が足りないのは事実だからな。細かいことは気にしていられないんだ」

その後店長のメイドと番号を登録して、俺たちはあまりにも早く決まったことで時間が余り、適当にぶらつくことにした。

「あっさり決まったな？」

「うん。でも良かった・・・一緒の場所で」

「そうだな」

本屋や服屋、アクセサリー店など色々な見せを回って日が傾き掛けた頃アパートに戻った。

「それじゃ、明日から頑張るとするか」

「ああ」

俺の部屋の前で別れて、真奈が部屋に入るのを見届けて俺も部屋に戻り、8 持頃に来た、美奈・涼子に明日からバイトをすることになったことを伝え、3 人で晩飯を食って食器片付けて、寝た。

「一緒にバイト・・・フフ・・・嬉しい」

お風呂とごはんを済ませて、歯を磨いてベッドに入り、枕を抱きしめて横になっている。

良かった。

別々じゃなくて・・・考えてることも全く一緒に本当にびっくりしたけど、それも嬉しかった。

「明日から、もっと楽しくなりそう!」

頑張ろう!

4月25日 月曜日〜4月27日 水曜日 0・5

月曜日、学校が終わって俺と真奈はハッピースマイルへ向かった。まず店長に挨拶してから、キッチンに居る人達に適当に挨拶してから、俺も真奈もホールでの仕事をするようになった。

「ま、適当にがんばってくれ。分からないことはこいつに聞け」

「よろしくね〜」

「ああ」

「よろしくお願いします」

紹介されたのはチーフの様でのほんとした女性で名前は北条咲ほつじょうさなと
いうそうだ。

年齢は20歳。

フリーターらしい。

髪は金髪でポニーテール。

目はたれ目で色は碧。

俺よりも背は少し高い。

このファミレスは仲の良い奴だけだろうが、大抵名字か名前で呼んでいる。

俺はチーフと呼ぶことにしたが、真奈は咲さんと呼ぶことにしたみ

たいだ。

「で、チーフ。俺らはまず何をすればいい？」

「そうね〜・・・まずは皿洗いからやってみようわ〜」

俺は皿洗い、真奈はホールの仕事をする事になり、基本的なことを教えてもらって、忙しいながらも充実した時間が流れた。

夜9時にバイトを終えて、シフト表をもらってから、アパートに帰った。

「どうだった？」

「うん・・・疲れたけど、楽しかった。みんなも親切に教えてくれたし」

「そっか、良かったな？」

「うん」

真奈は本当に嬉しそうに笑った。

翌日火曜日。

私たちは、とりあえず早く慣れろと店長に言われて今週は金曜日まで働くことになった。

いきなり週5日はきつくないかと思ったけど、裏央は特に何も言わなかったから私も特に何も言わなかった。裏央は最初から何もいうつもりがなかった気がするけど・・・。

裏央ってホールに出ても大丈夫なのかな？

基本いつも無表情だし、殆ど変わらない。

ハッピースマイルっていう店なのに笑顔のえの持も当てはまらないのが裏央。

「はぁ・・・大丈夫だろうか？」

「何がだ？」

「ひゃあ！裏央！いつからいたの！」

突然声を掛けられてびっくりして変な声を上げてしまった。

なんか周りの視線が集まってる気がする。

ちなみに場所は店。

ただ今バイト中です。

「さつきからずっといたが？とりあえず仕事しろよ？8卓の出来てるぞ？」

「え？あ、すみません！すぐに持って行きます！」

「焦らなくていいからね？」

「はい！行ってきます！」

ハンバーグ定食としょうが焼き定食をお盆に乗せて持つて行く。

「お待たせしました。ハンバーグ定食としょうが焼き定食です」

お熱いので注意してくださいねと言って、テーブルに置きごくゆっくりと言ってキッチンに戻った。

「転けなかったか？」

皿を洗いながら戻ってきた真奈に聞くと、

「転けてない！」

力強く言ってきた。

そんなに声を張り上げなくても十分聞こえるんだけどな……まあ、いいか。

「余り大声出すなよ？」

「あ」

言つと口を押さえる真奈。

その後チーフが来て俺にもホールに出てくると言ってきた。

「正気か？」

「どつという意味かしら？」

「いや別に……じゃあ、真奈が皿を洗うのか？」

「そうね」

「んじゃ、パスだ真奈」

丁度呼び出しが掛かったので俺が行くことになった。

「待たせた。注文は？」

敬語を使うつもりなんか更々ない。

面倒だし。

「……店員なんだから敬語くらい使いなさいよ？」

「いや、面倒だし……良いだろ別に？ほら、腹減ってるんだろ？」

「ぐ……確かにそうだけど……」

「良いじゃない、由香ちゃん？こんな人が1人くらいいた方が楽しいわよ」

「でも、葵い〜」

俺に文句を言ってきた方がゆか、で宥めた方があおい、というらしい。

まずゆかと呼ばれた方の女子だが、年は俺たちと殆ど変わらないだろう。

髪は翡翠色のショートヘア。

目の色は赤。

背は……まあ、小さい。

私服だったら間違いなく中学生に間違われるだろうな。

あおいと呼ばれて居る方は髪は銀髪で腰まであり、何も弄っていないのか真っ直ぐだ。

目は黄色。

背はゆかと呼ばれたほうと余り変わらないが、何故か子どもっぽ印象は受けない。

制服が同じでリボンが2人とも青いから3年だろうな。
ちなみに1年が赤、2年が黒だが・・・統一性がないな。

「わたしは豆腐サラダと唐揚げ定食でお願い。ほら、由香ちゃんも」

「うん・・・デミグラスハンバーグ定食とポテト」

「カロリー高」

打ち込みながら呟くと、

「良いでしょ別に!」

怒鳴られた。

「悪いなんか一言も言っていないが?」

「確かに」

「以上で良いか?」

「ええ」

「さっさと行け!」

「へいへい・・・暫くお待ちを」

キッチンに戻って注文を伝えて待っている間チーフと話していた。

最近の芸能界をどう思うか？と言う訳の分からない話題で……。

10分程話しているとさっきの2人から受けた注文の品が出来上がり、それを持って行く。

「ほれ、デミグラスハンバーグにポテト、それから唐揚げ定食と豆腐サラダな。

ごゆっくり〜」

俺が行った途端睨んできたがスルーして料理を置きさっさと戻っていく。

裏央の様子を見ていたけど、明らかにお客さんの顔が怒ってる様な顔になった。

一体何をしたんだろう？

そのまま料理を置いて戻ってきた裏央に聞いてもはぐらかされたから、後でお皿を下げに行った時に聞いてみようかなと想いながら皿を洗い続けた。

暫くして、さっきのお客さんのお皿を下げに行った時に少し聞いてみた。

「あの・・・さっきの人に何か言われましたか？」

「ん、さっきの人って？」

「あの男の子のことじゃない？でしょ？」

「はい」

それから話しを聞くと裏央が敬語を遣わずに注文を聞いたみたいでそれについて怒ってるみたいだった。

「すみません。注意しておきますので」

私が頭を下げると銀髪の長い髪の人が気にしなくていいと言ってくれたので、私はもう一度謝ってからお皿を下げキッチンに戻った。

「裏央！お客さんには敬語を遣わないと駄目じゃないか！」

「めんどい」

もう・・・ホントに大丈夫かな？

今日はそれから特に何も起きることなく過ぎていった。

翌日水曜日。

俺たちはただ今登校中。

適当に話しながら学校に着いて2限の休み時間、次は移動教室だから3階にある音楽室へと向かっている。

そしてその途中。

「あー！あんた昨日の！」

「ん？」

見ると俺を指さして声を上げている・・・

「ゆか、だっけか？」

がいた。

「なんで名前知ってるの！まさかストーカー！」

「・・・・・・・・」

少し沈黙して、

「「自意識過剰だな（ね）？」」

俺とあおいがハモった。

「えっ？どついついどつ？」

割と落ち込んだのか、あおいを見るゆか。

真奈は昨日の服装をよく見ていなかったのか、同じ学校だったことに驚いていた。

それから、時間もないと言うことで昼休み教室に来ると言ってきた。

来る必要は無いだろ？

ま、いいか……。

「じゃ」

「また後ほど」

「ええ。あ、2人の名前教えてちょうだい？」

音楽室へ向かおうとしたらあおいに止められてそれぞれ名乗った。

ゆかはこの奴の名前聞かなくてもいいとか言っていたが……。

「裏央。裏に中央の『央』で裏央だ」

「真奈です。真実の『真』に奈良の『奈』で真奈です」

「わたしは葵よ。それでこっちが」

「由香」

「よろしくね？」

「ああ」

「はい」

ついでにメアドと番号を葵とだけ交換した。

真奈は2人と交換していたがな。

音楽室へ向かい空いている席に真奈と座った時、鐘が鳴った。

校歌やら何やら歌っていたが俺は口パクで歌っていた。

途中、真奈に突かれたりもしたが、それでも口パクで歌った。

意外と疲れるんだよな・・・歌うの。

授業が終わり、教室に戻りながら説教され、4限が終わって弁当を食いながら2人が来るのを待っていたが、

「来ないな？」

5分経つても来なかった。

ブブブ・・・と携帯が鳴った。

「葵か？どうした？」

『ごめんなさい。由香ちゃんが動こうとしないから、悪いんだけど来てくれない？』

「ああ。何組だ？」

クラスを聞いて真奈に事情を話し、まだ半分ほど残っている弁当を包み、持って3階へ向かった。

着くと目印のつもりなのか葵が立っていた。

「行くか」

「うん」

俺たちは葵の元へ向かった。

4月27日 水曜日 0・5

「それで？なんでゆかは動かないんだ？」

「貴方に会いたくないって・・・」

「いや、そりゃそうだろうな。そもそも、お前らが来る必要性も感じなかったし」

「こら、裏央。敬語を遣わないと駄目だと昨日言ったばかりじゃないか」

それについては別にどうでもいい。

とりあえず教室に入って、ゆかの近くへ行き、葵が声を掛けると俺たちの方を見たが、俺の顔を見た途端逸らした。

「そんなに嫌われるようなことはしてないと思うんだが・・・」

「そうなんだけどね・・・」

まあ、俺がいても話は進まないだろうから俺だけ戻ることにした。

真奈が一瞬だけ悲しそうな顔をしたような気がしたが、上との繋がりもあつた方が良かったらうからな。

頭を軽くポンポンとして、教室に戻った。

「仲が良いのね？」

「・・・どうなんでしょうね・・・」

確かに学校で話すのは生徒なら裏央しか居ないけど、裏央がどんな思い出私と接してくれているのかは分からないし。
私は友達だと思ってるけど、裏央はそんなこと意識してるとは思えないし。

「違うの？」

「分かりません」

はにかんで言うと由香さんが口を開いた。

「あんな奴とは別れた方がいいわよ！まさか同じ学校だったなんて
「！」

「昨日のこと・・・やっぱり怒ってますか？」

「当たり前でしょ！あなたのことはいい子だと思ってるけど、あいつはむかつく！」

「わたしは別に構わなかったけど？」

「葵は気にしなすぎ……大体女の子の前でカロリーがどうこう言うだけでむかつくの!」

「それは仕方ありませんよ」

「「え?」」

私が言った言葉に同時に声を上げる先輩達。

「裏央は脂っこい物が苦手で……お弁当も野菜が中心なんです。精々ウインナーが2本くらい入ってるだけで、見るだけでも気分が悪くなってしまみたいですよ」

「それと、昨日のことと、何か関係あるの?」

「裏央に取って、ハンバーグや唐揚げ、脂っこいものばかりの店で働くことが、ちょっととしたストレスに繋がったのかも知れません……それを無意識に発散しようとして、そんなことを言ったんじゃないかと……決して悪気は無かったと思います」

まあ、あくまで推測でしかないけど。

「でも、それならコンビニなんかでバイトをすればいいんじゃない?」

「確かにそうよね?なんでファミレスなの?」

「それは……」

「「それは?」」

「……………どうしてでしょうね?」

私にも分からない。

どうしてなんだろう?

「聞いてないの?」

「はい……特に何も考えずに決まったので」

「でも、そうだとしたら、ちょっと気の毒ね……少しなら、食べ
ても問題は無いんでしょう?」

「どうでしょう? ウィンナーだってバランスを取るために入れている
だけかも知れませんが……聞いてみましょうか?」

「お願い出来る?」

「はい」

「それじゃ、ごはん食べましょ? もう、余り時間もないから」

言われて時計を見ると確かに時間は残し少なくなっていた。

「ただいま」

「お帰り。どうだった？」

「ここは家じゃないんだが・・・。」

「楽しかったぞ？裏央も一緒に食べれば良かったのに」

「ゆかがあれだからな」

あの状態で一緒に食べるなんてことは出来ないだろう。

昼休みが終わるまで適度にだべって午後の授業も適当に過ごして、放課後になり、俺たちはバイトに向かった。

127

バイトの休憩中、真奈が何故ここでバイトをすることにしたのか聞いてきた。

「特に理由はないが？」

「そうなの？」

「ああ。ま、同じ場所だったほうが良いだろうとは思ったが・・・。」

それ位しかない。

「じゃあ、もう一つ質問だけど、いい？」

「ああ」

「私のこと、どう思ってる？」

「……………」

聞かれて俺は咄嗟に答えることが出来なかった。

暫く考えこんでいると、真奈がやっぱりいいと言い出し、まだ休憩も終わってないのに部屋を出て行った。

「…………考えたこと無かったな…………友達か？」

俺も部屋を出て仕事を再開した。

「どうしてあんなことを聞いたんだろう？」

本当は先輩に言われたことを聞こうと思ったのに…………気付いたら、あんなことを言っていた。

悩んでいると咲さんが来て、どうしたのかと尋ねてきたけど、どう答えたらいいのか分からなくて、何でも無いですとしか答えられなかった。

裏央も部屋から出てきて仕事を再開した。

呼び出し音が鳴り、向かうと由香さんと葵さんだった。

「また来てくれたんですね？」

「ええ。それで、聞けたかしら？」

「いえ・・・聞こうと思ったら、別のことを聞いてしまいました」

「別のことって・・・何をきいたの？」

「私のことをどう思ってるのかって」

「まあ、大胆ね？」

「いえ！そういう訳じゃ／＼」

その後主に葵さんにからかわれた。

注文を聞いてキッチンに戻り伝えてから、皿を洗ってる裏央の隣で待機している。

「さっきの質問だが・・・俺自身お前のことをどう思ってるのか分からない」

「え？」

「友達かとも思ったが・・・どうも違う気がしてな？」

「どっぴいっ感じに?」

「・・・何なんだろうな?本当に分からないんだ」

「そっか・・・いつか、分かったら教えてくれる?」

「ああ」

それから葵さん達と少し話して、仕事をして・・・私達はアパートに帰った。

「遅い!」

「待ちくたびれたわよ?」

「ホントですよ」

「いや、知らねえよ」

帰ると部屋に涼子、美奈、恵里がいた。

「先生方も恵里ちゃんも何してるんですか?」

呆れたように真奈が聞くと、

「「「なんとなく」」」

3人八モって答えた。

結局、5人で晩飯を食った。

4月28日 木曜日 1

「それじゃ、行ってくる」

「ああ」

真奈は注文を取りに客の所に行った。

俺は相変わらず皿洗い中だ。

まあ、あの2人じゃないと敬語で接客しないといけないからな・・・
そんな面倒なことはしたくないし。

昨日から、暇があれば殆どの時間を真奈に聞かれたことを考える時間に使っているか、未だに答えは出ない。

何故だろうな・・・友達なのは確かだとは思うが、どうにもそんな感覚とは違う。

では何かと聞かれても分からないし・・・。

「はあ」

「どうしたの？ため息なんてついて」

「チーフか・・・少し考えごとだ」

そういえばチーフが仕事してるところを見たこと無いんだが、ちゃんと仕事をしているのか？

チーフになるってことはそれなりに経験はあるのかも知れないが。

良ければ相談に乗ると言われて、1人で考えていても仕方無いと思
った俺はお言葉に甘えることにした。

「それって・・・真奈ちゃんを異性として意識してるんじゃないの
?」

「は?」

「なんとなくそう思ったただけなんだけどね?あまり深く考えなくて
も良いと思うわよ?」

「俺もそう思っではいるんだがな・・・どうにも・・・」

「何が?」

話込んでいると真奈が戻ってきた。
既に伝えている様だ・・・仕事が早いな。

「お前に昨日聞かれたことを相談してたんだ・・・いくら考えても、
分からなくてな?」

「そんなに急いで考えなくてもいいよ?」

「俺もそれは分かってるんだが・・・どうしてもな?考えてしまっ
んだよ」

「じゃあ、今はどう思ってる?」

「まあ、友達だな」

「それなら、今はそれでもいい。詳しく分かったらまた教えてよ」

「ああ」

なんとなくだが、すっきりした。

その後、真奈から、今日もあの2人が来ていることを聞いた。しかも、真奈の部屋にいくらしい。

バイトが終わって、俺は真奈と一緒に2人と合流した。

「げっ」

「こんばんは、裏央くん？」

「おう。とりあえず夜は危ないからアパートまで送るよ。ゆかは嫌だろうが、我慢してくれ」

「.....」

無視かい。

まあ、いいが。

それから3人と一緒にアパートまで行って、俺がいつまでもどこにも行かないことに疑問を持ったゆかが聞いてきた。

「なんでまだいんの？」

「俺の部屋がここだから。それじゃ、真奈？あまり騒がしくするなよ？」

「ああ」

俺はそれだけ言ってから部屋に入った。

するとまた涼子達がいた。

「暇なのか？」

「「「うん」「」」

即答かよ。

「勝手に風呂借りたぞ？」

「「ご飯は今から作るからね？」

「真奈さんは一緒じゃないんですか？」

友達と一緒に泊まり会だと説明すると、3人はそっちに行った。あの2人がどういったリアクションを取るか興味があったが、流石に勝手い入る訳にはいかんしな。

大人しく飯を食って風呂に入って寝るとしよう。

にしても・・・

『きゃ！涼子先生！どこ触ってるんですか！？』

『いいだろう？減るもんじゃないし』

『葵ちゃんってスタイル良いわね？』

『そうですか？』

『裏央って大きいほうが好みなのかな？』

『それじゃ、私に勝ち目がないじゃないですか！』

騒がしいな。

ちなみに上からゆか、涼子、美奈、葵、真奈、恵里。

「ま、こいつらが騒がしいのは別に嫌じゃないな・・・」

俺はそう思いながら眠りについた。

4月28日 木曜日 2

「それじゃ、行ってくる」

「ああ」

私は注文を取りに行く為にキッチンを出た。

テーブルに行って注文を取っていると、別のテーブルからも呼ばれて、その中に先輩達が居た。

「こんにちは」

「頑張ってるみたいね」

「あいつも少しは見習えっの・・・」

葵さんには労われて、由香さんは裏央の文句を言っていた。

注文を取って、戻ろうとしたら、葵さんに呼び止められて話を聞くと、今日私の部屋に行ってもいいかということだった。

私はもちろん了承した。

もっと色々話したいと思ってるし、恵里ちゃんも紹介したい。

仕事もあるので、後は夜にということになり、終わるまで待つてもらうことになった。

キッチンに戻って注文を伝えていると、

「俺もそう思っではいるんだがな・・・どうにも・・・」

と言う裏央の声が聞こえて、何のことか気になって聞いてみたら、私が聞いたことを考えてくれていたらしい。

「そんなに急いで考えなくてもいいよ？」

考えてくれるのは嬉しいけど、焦って答えを出して欲しくない。曖昧な答えだったら私が納得出来ないから。

「俺もそれは分かってるんだが・・・どうしてもな？考えてしまっ
んだよ」

そう答える裏央に私は、今はどう思っかけているのかを聞いた。

「まあ、友達だな」

返ってきたのは簡単な言葉。

でも・・・。

「それなら、今はそれでもいい。詳しく分かったらまた教えてよ」

「ああ」

友達と思っかけていることが分かっただけでも良かった。

「あ、そういえばね？葵さんと由香さんが来てたよ？」

「最近よく来るな・・・」

「そうだね。それで、今晚私の部屋にくることになったから」

「そうか。ま、楽しめよ？」

「うん」

バイトが終わってから、咲さん達に挨拶をして裏口から出て、葵さんたちの元まで行くと、裏央を見た由香さんが、ものすごく嫌そうな顔をした。

声にも出てたけど・・・。

「こんばんは、裏央くん？」

「おう。とりあえず夜は危ないからアパートまで送るよ。ゆかは嫌だろうが、我慢してくれ」

「・・・・・・」

裏央の言葉を完全に無視している。

結局、裏央と由香さんは一度も言葉を交わさなかった。

私たちとは普通に話したけど・・・。

アパートに着いても裏央がどこにも行かないことを疑問に思った由香さんがやっと裏央と口をきいた。

「なんでまだいんの？」

「俺の部屋がここだから。それじゃ、真奈？あまり騒がしくするなよ？」

内容は余り良くなかったけど、何も話さないよりは多分マシだと思う。

「ああ」

一言答えて、部屋に入り、適当にくつろいでもらうことにして、冷蔵庫からお茶を出してコップに注ぎテーブルに置く。

「ありがとう」

「どうも」

私も座ってお茶を飲もうとコップに手を伸ばしたら、

「よう、遠藤。私たちも混ぜてくれ？ん、お前らもいたのか？」

突然涼子先生と美奈先生、恵里ちゃんが来た。

飲み物を追加して一気に賑やかになった私の部屋。

「そういえば、遠藤、バイトはどうだ？」

「楽しいですよ？葵さんと由香さんも最近よく来てくれますし」

「そうなの？今度わたしたちも行ってみようよ？涼子」

「そうだな・・・からかうのも楽しそうだ」

出来れば止めてください。

多分・・・というか絶対裏央は軽くあしらうから矛先が私に向く。

それから色々話したり、晩ご飯を食べたり、楽しい時間を過ごした。

「きゃ！涼子先生！どこ触ってるんですか!？」

由香さんの体をまさぐる涼子先生。

「いいだろう？減るもんじやないし」

多分いけないことをしているとは思ってないですよね？

「葵ちゃんってスタイル良いわね？」

「そうですね？」

こっちは由香さん達とは違って静かに過ごしており、話題はスタイルのこと。

「裏央って大きいほうが好みなのかな？」

私も悪くはないとは思ってるけど、先生達と葵さんい比べたら・・・。

「それじゃ、私に勝ち目がないじゃないですか!！」

恵里ちゃんも同じ感想らしい。

とりあえず、頑張ろうかな？

「電気消しますよ〜？」

『はい（ああ）』

パチッとスイッチを押して消灯し、布団に潜る。

成り行きでみんな泊まることになった。

「それにしても・・・先輩に敬語は遣わない、客として行っても敬語を遣わないなんて、あれで本当に大丈夫なの？」

「あいつが敬語を遣う相手なんて今まで居なかったと思うぞ？なあ、美奈？」

「うん。相手が誰でもね・・・初めて会った時から既にため口だったから」

「そうなんですか？」

それはなんと言うか、以外だった。

少なからず親しくなってから今の状態になったと思っていたから。

「いつからそうなったんでしょーうね？お兄さんは」

「恵里ちゃん、裏央くんお妹なの？」

「違いますよ？単にそう呼んでいるだけです」

「あんなのを兄と呼べるの？」

由香さんはホントどうして、こんなに裏央を嫌ってるんだろう？
いくらため口で接したからと言って、こんなにもこんなに怒ることは無いと思
うけど……。

もしかしたら単に意地を張ってるだけかも知れないけど。

「はい。私にとっては十分兄として慕うことができます」

何があったんだろう。

まあ、いいか。

「そろそろ寝ましよう？明日も学校がありますし」

「そうね・・・由香ちゃんも怒ったままじゃ良い夢見られないわよ？」

「あんまり関係ないと思うけど・・・実際、眠いから、寝ようかな
？お休み」

その後すぐに寝息が聞こえてきた。

葵さん以外のみんなが、

『寝るの早!』

と突っ込んだ。

それから私たちも眠った。

明日裏央に怒られないかな?と思いつながら・・・。

結構騒がしくしちゃったしね?

「裏央ならいいか」

とりあえずバイトも明日で一段落。

頑張ろう。

4月29日 金曜日 1

今日は祝日で学校が休みだから、朝からバイトだ。

いつもと同じくらいの時間に目を覚ましたが、開店は10時だから、まだまだ余裕はある。

とりあえずテレビを点けてチャンネルを変えていくが、平日の朝なんてたいした番組はないんだよな。

暇だ・・・真奈んどこでもいくか？

「おーい、真奈・・・起きてるか？」

扉をノックしてしばらくすると中から騒がしい音が聞こえきた。

それから少しの間静かになり、すこしして扉から制服に着替えた真奈が出てきた。

「裏央！つて・・・なんで私服？」

「寝惚けてるのか？今日は祝日だぞ？」

「・・・あ！」

どうつあら忘れていたみたいだ。

開いている扉から中を覗いてみると、涼子たちも寝ていた。

布団は足りなかったのか、同じ布団で2人くらいが一緒に寝ており、妹に葵とゆかもいる。

「とりあえず着替える。今日は朝からバイトだぞ？」

「うん、分かった。裏央は始まるまで何するの？」

「適当に辺りをぶらつくよ・・・おまえも来るか？」

「うん！」

「なら、外で待ってるよ。急がなくていいからな？ちゃんとあいつらにもどうにかして伝えておけ」

それだけ言って俺は一度部屋に戻り、携帯と財布をポケットに入れて、鍵を閉めてアパート入り口のところで待っていた。

祝日は商店街が盛り上がるが、店はどうだろうか・・・まだ本当の忙しさを知らない俺としてはそろそろ知っておいた方がいいと思っているんだが、客が来ないことにはな・・・。

どこを回ろつかと考えながら空を見上げていると真奈が出てきた。

皆には手紙をおいて来たようなので、それをあいつらがちゃんと見つければ大丈夫だろう。

「行くか」

「うん」

途中、コンビニで朝飯を買ったりして店に向かったが、まだ8時ちょい前。

こんな時間に開いている店も少ないから、やることがない。

もつと家にも良かったが、やることがないから結局同じだしな
。。。

「公園でも行くか？」

「いいね。もう随分行ってないし・・・ブランコでもする？」

「お前がいいならな？」

「なら決まり」

俺たちは公園に向かった。

公園には朝のジョギングをしている奴や犬の散歩をしている奴くらいしか人がいない。

もちろんブランコも誰も乗っていない。

「ある意味貸し切りだな」

「そうだね・・・裏央って昔はこんなところで遊んだりしたの？」

「殆どしていなかったかもな・・・やりたいとも思ってたか
も知れない。お前は？」

「お姉ちゃんが家にいる時はよく一緒に遊んだ。シーソーとか砂
場で穴を掘ったりとかして。
楽しかったな・・・」

真奈は昔を思い出すように目を閉じた。

砂場で遊んだ時は決まって服が汚れて、お母さんにはもう少し気をつけなさいと言われた。

一度も女の子らしく、とかは言われなかったから、今思い返してみればそれは結構良いことだったのかも知れない。

こっちに来る前の学校で、子どもころに何をして遊んだかという話になった時、殆どの子が女のこらしい遊びを挙げていたけど、私は木登りとかもよくしていた。

それを言つと、決まってみんなは可笑しいと言っただけけど、私はそうは思わなかった。

お父さんもお母さんも、子どもだからこそできる遊びもあるって言うてたし、それは真実だなと思っていたから、私はやりたいことはすぐにやった。

実際高校生になった今は、木登りは少し恥ずかしいと思っている自分がいるし……。

「久しぶりに登ってみようかな？」

この辺に高い木はあるのかな？

「どこにだ？」

「・・・昔はよく木登りとかもしてたから、どこかに高い木はないかなと思って」

「それなら、向こうの丘に街一番の木がある」

裏央がそう言って指さしたのは学校の裏の方。

見てみると確かに一本だけ突き出ている木があった。

「さすがにあれは高いかな・・・」

遠くからこんなにハッキリ見えるということは近くに行けばもっと大きいと感ずるだろう。

「そうか？登ってみれば体が思い出して結構上までいけるかも知れないぞ？」

「・・・そうかな？」

「明日行ってみるか？バイトもないし、涼子たちも入れてピクニックするのも良いと思うぞ？」

ピクニック・・・。

「なんか、響きがいいかも。行こうか？お弁当も作って」

「ああ。帰ったら涼子たちにも聞いてみるとしよう」

「うん！」

なんだか今から楽しみになってきた。

それからブランコに乗って、俺は足ですこしだけ前後して、真奈ははしゃいでいるのか結構激しかった。

一度止まってから今度は立ちこぎをして、反動を付けて前方に跳んだり、本当に子どもみたいに遊んでいた。

1時間ほど経つと、近くの子どもも来て少しずつ公園に家族が来るようになってきた。

「そろそろ行くか」

「でも、まだ時間あるね？」

「少し早めに行くくらいならいいだろ。他にも来ている奴はいるだろうし、適当に駄弁ってようぜ？」

「……咲さん、来てるのかな？」

「どうだろうな？行けば分かるさ」

「うん」

俺たちは店に向かった。

まだ店が開くまで1時間弱。

と言っても本当にすることもないから、遅れないようにするために
も行っておいて損はないだろう。

もし仕事があったら、さっさと片付ければ良いだけだしな。

途中の店などを横目に見ながら、真奈があれが可愛いかったとか、
あれ欲しいな、とか言っていた。

こういう所は素直に可愛いと思う。

いつまでも無邪気な心を持ち続けると言うのは簡単なようで難しい
ことだからな。

当たり前前なのが当たり前前に行けると同じ様に……。

店に着いて裏口に行くと、ちょうどチーフが来ていた。

声をかけて一緒に中に入り、特に仕事もないということなので適当
にお喋りをする事になり、明日のことを話すと、なぜかチーフも
参加することになった。

まあ、いいが。

真奈たちが楽しめるならそれでいいしな。

それから3〜40分が経過し、俺たちは制服に着替えた。

キッチンに出て、店が開くのを待つ。
店長や他の店員も来だしてだいぶ賑やかになってきた時、店が開いた。

「さて、今週はこれで最後だしな・・・やるとするか」

「おー！」

真奈が元気にかけ声を上げた。

ま、適当に頑張るとするか。

4月29日 金曜日 2

「おゝい。裏央・・・こつちだ」

「何でいるんだよ・・・」

真奈に呼ばれてホールに出てみればいきなり涼子に呼ばれた。美奈もいるし、ホントどういう訳か葵とゆかまでいる。

ゆかは相変わらず俺をみると顔を顰めるが・・・。

近寄って注文を聞き、ついでに明日のことを伝えた。

「おお、いいなそれは」

「そうね・・・ピクニックなんて久し振り。葵ちゃんと由香ちゃんも行くでしょ？」

「ちなみに真奈は全員で行く気満々だったぞ？」

多分。

ゆかが俺もいるのかと聞いてきたから、想像に任せると言った。いるっちはつきり言ったら行かないとか言い出しそうだし・・・そうだったら、真奈が悲しむ。

キッチンに戻って、注文を伝え真奈に明日のことを伝えると、嬉しそうな顔をした。

聞いたかと思っていたが、何でも行つてすぐに俺を呼べと頼まれたらしい。

「はあ……」

溜息しかでないな。

まだ開いてすぐの時間だったからなのか、あまり客は来ずに暇な時間が流れた。

やることも殆ど無くなり、今は真奈、チーフとなぜか店長もいる。

俺はその後数分して呼び出しがあったので、またホールに向かった。

「またお前らか……今度はなんだ？」

「ああ、明日のことだが、場所はどこなんだ？」

「学校の裏の丘だよ。でかい木が一本あるだろ？」

「へえ……懐かしいわね。昔はよく遊んだよね」

「そつだなあ……」

「で、注文は？」

「ああ、私はアイスコーヒー」

「わたしはレモンティー」

「コーラ」

「わたしはミルクティーをお願いね？」

涼子、美奈、ゆか、葵の順で言ってきた。

ゆかも注文だけなら言ってくれるが、それ以外は本当に全く話さないんだよな。

俺がいない間は話しているんだろうか……。

「そんじゃ、ちよいとお待ちを」

キッチンに戻り、それぞれの飲み物をグラスに入れて盆に乗せてから持って行く。

その時に一瞬だけゆかの笑っている声が聞こえたが、俺を見て直ぐに外を見始めた。

「お待ち」

テーブルに置いてキッチンに戻る。

客が増え始めたのか、すこしずつ呼び出しの数が増えていった。時計を見ると11時を指している。

確かに増え始める時間だ。

真奈も忙しく動いているし……俺より小さいからなのかどうかは分からないが、その姿がなぜか小動物の様に見えて微笑ましかっ

た。

さて、俺も行くか。

開店から約1時間後。

先生たちはまだいるけど、他にもお客さんが来始めた。

呼び出しの数が多くなって、さっきまでみたいに話している余裕もなくなり、今はあっちこっちを行ったり来たりしている。

でも、慣れてきているのか、こうして忙しなく動いていることが楽しく思える。

小さい頃から体を動かすのは好きだったけど、それとはまた違うところが楽しい。

裏央がどう思ってるかは分からないけど。

暫く忙しく動き続けて、落ち着いたのは約1時間後のことだった。キッチンに戻り注文を伝えて、流しのところで待機する。

チーフも今は注文を取りに行っていてここには私一人。

後では料理をつくる音が聞こえる。

明日のお弁当の中身はどうしようかな？

とりあえず裏央のことを考えて野菜を多く使ったサンドウィッチとかが良いかも知れない。

「楽しみだなあ」

早く明日にならないかな？

明日のことに期待を寄せながら、私は今週最後のバイトをこなしていった。

裏央は相変わらずため口で接客していた。

「ちて、帰るか」

「うん」

午後6時。

バイトも終わり、俺たちは並んでアパートに向かって歩き出す。

土日は休みで、明日はピクニック。

ゆかが来るかは分からないが、もし来るなら俺は遅れて行くか、行かないかな。

折角のピクニックなのに楽しめないんじゃない意味がない。

「裏央はあした食べたい物ある？」

真奈が突然聞いてきた。

「まあ、肉類があまりなければそれでいいが・・・お前が作るのか？」

「そのつもりだけど・・・もしかして、食べたくない？」

なぜか悲しそうな顔で聞いてきた。

「んなわけないだろ？お前の飯が美味しいのはすでに知ってるし、たまには自分以外の飯も食いたいと思うさ・・・楽しみにしてるよ」

俺が言うと、真奈は一気に嬉しそうな顔になった。

「そっか。良かった。頑張るから、期待しててね？」

「ああ」

俺は短く返事をして真奈の頭に手を乗せた。
そのままくしゃくしゃとなで回す。

「わ・・・なに？」

「なんとなくだ。なんか、今日忙しく動いてるお前が小動物に見えてな・・・」

「小動物？私が？」

「ああ」

「でも、それなら・・・言ったら失礼かもだけど、由香さんの方が」

「あいつは間違いなく猫だな」

「猫？」

言いながら手を頭から離すと真奈が小さく声を漏らしたが、特段きにせず話し始めた。

「ずっと俺のことを警戒しているというか・・・明らかに嫌ってるだろ？猫は怒ったときとかはどこをどうする？それをあいつに当て嵌めてみる」

「・・・怒ったとき・・・ああ、成る程、確かに」

あまり時間もかけずに答えが出た様だ。
1人で納得している。

「じゃあ、私は？」

「ウサギ」

俺は止まってから横を見て直ぐに言った。

「え？」

あまりに即答したから驚いたようだ。

「なんで？」

「何となくだが、お前寂しがり屋だろ？」

「・・・うん／＼／」

恥ずかしいのか赤面して俯きながらも肯定した。

そんな真奈の頭にまた手を乗せて今度はそつとなでる。

「雷に怯えていた時、お前は家族を求めた。当たり前のことかも知れないが、俺にはそれが寂しがっている様に写ったんだ・・・だから、ウサギ」

今は学校でも葵たちがいるから大丈夫だろうが、あの2人は来年に卒業するし、それまでに親しく出来る奴がどれくらい出来るかは分からないが、こいつの人柄なら何とかなるだろう。

「裏央はどこにも行かない？」

「行くところなんてないさ」

「うん・・・ねえ、裏央？」

「なんだ？」

また明日のことを何か聞いてくるのかと思ったが、

「今日、部屋に行ってもいい？」

全く違うことだった。

どろぢぢら、こいつは本当にウサギらしい・・・。

4月29日 金曜日 夜 その1

アパートに帰って暫くは一人で過ごしていたが、7時頃になって真奈が着替を持って来た。

ちなみに、涼子たちはあのままどこかに行ったのか帰ってきていない。

恵理もいつもの様に知らぬ間にどこかに行っていた。

「こんばんは」

「おう。入れ」

「お邪魔します」

そつと部屋に入ってくる真奈は何か緊張でもしているのか、動かなくなつた。

緊張することなんて何もないと思うが・・・とりあえず腹減つた。

「早く行つてくれ」

「あ、ごめん」

慌てて中に入っていく真奈に続いて俺も入り、座って待つように言つてから、俺は晩飯の準備を始めた。

部屋には暫くテレビの音と調理をする音が流れた。

できあがった料理をさらに移してテーブルに運び、食べ始めたが、

「・・・・・・・・」

真奈が一言も喋らない。

本当に緊張でもしているのだろうか？

俺は別に沈黙はどうも思わないが、いつもあれだけ喋っていた奴が急に何も話さなくなると、何か物足りない気分になってくる。

今はアパートに俺たち二人しかいないからかなり静かだし・・・。

『明日は快晴となるでしょう』

ふとテレビに意識を向けるとそう言った所だった。

「だよ。良かったな？」

「・・・・・・・・」

「？真奈？」

聞いても反応がなかったからもう一度呼んでみたが、

「・・・・・・・・」

またも反応がなかった。
黙々と飯を食っている。

大声を出すのは疲れるし・・・突いてみるか。

箸と茶碗を置いて真奈に近寄り頬に指を近づけて、

ぷに、と指を押しつけた。

「おお」

思った以上の弾力に感心してしまった。

それでも意識がこっちに帰ってこないから、とりあえず突き続けることに・・・。

この状態でも飯を食っているから、ある意味器用だな。

「疲れた・・・」

最後に頭をぽふぽふとしてもとの位置に戻り残りを片付ける。

真奈は自分で戻ってくるまで放っておくことにして、食器洗うか。

俺は食器を洗い始めた。

どうしてか今日は緊張する。

いつもは何も気にせず裏央と話せていたのに、どうしたんだろう？
部屋に入って暫くはテレビを見ながら落ち着こうと思ったけど、よく考えてみたら今はアパートに私たち以外誰もいない。
恵理ちゃんはどこかに行ってるし・・・先生たちもなにをしているのか戻ってきていない。

ホントどうしたんだろう？

自分で自分が分からない。

帰り道で、裏央が私のことをウサギと言った時、この間のことだけで私が寂しがりだつてことに気付いたことが、びっくりしたけど嬉しかった。

「ああ～～～～・・・」

思わず変なうめき声を上げてしまった。

「何変な声出してんだ？」

「え？きゃー！」

裏央の声が聞こえてその方を見ると、目の前にいてびっくりした。

心臓がすごいドキドキしてる。

「やっと戻ってきたか・・・先に風呂入れ。もう準備出来てるから」

「裏央はもう入ったの？」

「俺は後で入る。気にしなくて良いからゆっくり浸かってこい」

「でも、裏央、疲れてないの？」

今日のバイトは結構忙しくて私は疲れた。

体力がないからかも知れないけど、今週一番の忙しさだったと思う。

裏央は基本が無表情だから分からないけど、多少は疲れがある筈だ。

それなのに、客の私が入ってもいいのかな？

「男の後に入りたくはないだろ？」

「でも、裏央なら・・・」

あんまり嫌じゃない・・・。

「いいから、熱い内に入れよ？温いのは嫌だろ？」

「確かに・・・分かった、先に使わせてもらっかね？」

「おっ」

食器だけ流しに持って行ってから着替えをもってお風呂に向かった。

テレビを消してベッドに座り、ヘッドフォンを付けて音楽を流し始めた。

聞いているのは現役女子高校生が組んでいるバンド。

作詞作曲から演奏まで全て自分たちでしており、最近は人気も高くなってきた。

目を閉じて腕組みをして指でリズムを取る。

1年の時は学校でも授業以外の時はいつもこうして過ごしていたが、真奈と出会っていつの間にか一緒にいる時間が多くなってからは家でしかこうして過ごしていなかった。

だが、真奈という時間は嫌いじゃない。

最初は鬱陶しいと思っていたが、今はバイトまで一緒にしている。

いつからだろうな？

俺が真奈を鬱陶しく思わなくなったのは……。

考えても分からないか。

気付いたらそうになっていた。

それでいい。

考えるのは終わりにして、音楽に耳を傾ける。
曲は終わりに近づいており、今は静かにゆっくりと流れているが、
最後に思いつき盛り上がり曲は終わった。

この瞬間が俺は好きだ。

静かになったかと思ったら突然激しくなる。

それに何とも言えない感動を感じる。

曲は次の曲に変わって、今度は全体的に静かな音楽が流れる。

それから真奈が上がってくるまでの約40分間俺はそうして過ごした。

お風呂から上がると裏央はヘッドフォンを付けて音楽を聴いていた。
その姿を見て思わず笑みが零れる。

最初の頃はいつもヘッドフォンを付けていて、休み時間なんかもず
っとそうしていた。

話しかけても直ぐに外してくれないこととかもあったけど、いつの
間にか付けなくなっていた。

登校中もそうだったから、もしかしたら私に気を遣ったのかも知れない。

お昼もいつも勝手に一緒に食べていたのに、何も言わないでくれて・・・興味がなかったからなんだろうけど。

でも、探しに来てくれた時は嬉しかったな・・・勝手に肩を借りた私にも何も言わないでくれたし、その後には食堂でも奢ってくれて・・・。

「あ」

そう言えばあの時、おばあさんに裏央の彼女かって聞かれたっけ・・・あの時にはもう意識してたのかな？

恥ずかしくて裏央の顔を見ることも出来なかったし・・・
・・・ちよつと、恥ずかしくなってきた。

裏央に近づいて、頬をつんつんとつつく。

裏央は目を開いて、私を見てからヘッドフォンを外した。

「仕返しかな？」

突然裏央が聞いてきた。

「なんの？」

私は問い返す。

「さつき、飯を食っている時に反応がなかったから、頬をつついてみたんだ。「え？」それでも反応がなかったから放置していたが・・・」

「それ・・・ホント？」

「ああ。結構柔らかかったな」

「//////////」

その言葉を聞いて、一気に顔が赤くなる。

そのまま顔を逸らそうとしたら、

「はは・・・」

裏央が笑った。

「あ」

ドキンと心臓が跳ねた。

「じゃ、俺は風呂入ってくるからな？ヘッドフォンは使いたいのなら

使って構わない」

そういつて頭をポンと叩いて、裏央はお風呂に行った。

扉が閉まった音を聞いて、私はその場にペタンと座り込み胸に手を当てる。

心臓はまだドキドキしていて、暫くは収まってくれそうにない。

「……どろしよづ／＼／」

裏央の笑顔が頭から離れない。

4月29日 金曜日 夜 その2

風呂から上がってみると、真奈はヘッドフォンに手を当てて目を閉じて音楽を聴いており、詩を口ずさんでいた。

その声を聞いていたかと思ひ、俺は静かにベッドの近くに腰掛けた。聴いているのは静かな曲だが、なんとなくか真奈に合っている。

そう感じた。

目を閉じて、俺も口ずさむ。

暫く部屋には俺と真奈の音が響いた。

曲が終わって、俺は目を開いた。

真奈は次の曲に行っており、今度はさっきよりも早いリズムの音楽でヘッドフォンをトントンと指で叩いてリズムを取っている。聴いたことがない曲だったのか、口ずさんではいなかったが、楽しそうだった。

時刻は9時4分。

真奈が来て2時間が経っていた。

意識していないときは時間ってのは直ぐに流れていくな……。

明日の出発時間とか決めないとな。
集合時間と場所も。

テーブルに置いてある携帯を取り、葵に、明日の集合場所を決めた
いから住んでいる所を教えてくださいという内容にゆかには教えるなど
メール送り、返信を待つ。

ブブブブ・・・と返信がきたことを伝える携帯を開き、メールを開
く。

『住んでいるのはあなた達のバイト先の近くよ？由香ちゃんも近所
だから、集合場所はハッピースマイルでどう？時間はそっちに合わ
せるから、決まったらまたメールしてね？由香ちゃんには言っとな
いけど、明日は一緒にいくからね？』

成る程、近いからあんなに来ていたのか。

携帯を閉じて、真奈に呼びかけるが、未だ音楽を聴くのに夢中なの
か聞こえていない。

「・・・・・・・・あ・・・・・・・・」

俺は真奈からヘッドフォンを取った。

いきなりすることに驚き、目を開いた真奈と俺の目が合う。

「・・・・・・・・りりりりり、裏央！／／／いつからいたの！／／／」

なぜどもる？

「5分位前からだな・・・で、明日のことだが、待ち合わせ場所はバイト先に決まった」

「え？あ、ピクニックの？」

「そつだ。時間はこっちに合わせるみたいだから・・・何時にする？あまり早い必要はないと思うが」

そんなに急いで行くものでもないし、ゆっくり楽しめた方が良さそう。

「店が開くのは10時だから・・・10時半くらいでいいんじゃない？」

「んじゃ、決まり。涼子達には後で伝えよう」

「うん」

俺は葵に集合時間が決まったことのメールを送った。

直ぐに返信が来て簡単に

『了解です』

と書かれていた。

それから弁当のことなどを話し合っ過ぎて、時刻が10時を回った頃、部屋の扉が開き涼子と美奈が入ってきた。

そして遅れて妹も……。

どうやら、涼子達から聞いて急ぎ戻ってきたらしい。

なぜ真奈がいるのかという疑問が出たが明日の打ち合わせと適当に誤魔化し、集合時間やらを説明していく。

特に反対意見が出ることもなく話しは進み、涼子達はそれぞれの部屋に戻っていった。

急に先生たちが来た時はびっくりした。

せめてノックくらいして欲しい。

どうして、私がいるのかと聞かれたが裏央が誤魔化してくれた。

それから明日のことを話して先生達は部屋に帰っていった。

「俺はもう寝るが、お前は どうする？泊まるんだろ？」

心中で安堵の息をついていると裏央にそう聞かれた。

「あ、それなら私も寝る……テーブル動かしてもいい？」

動かさなくても大丈夫かも知れないけど、もし寝返りを打ったりして、テーブルの方だったら確実に頭をぶつけてしまう。

そう思っただけ聞いてただけ、

「必要ないぞ？」

と裏央は言った。

「ベッドはお前が使っていていい。俺はソファで寝るからな」

「え、そんな・・・だって、この部屋は裏央のだし、悪いよ」

「俺は構わない。電気消すぞ？」

パチッとスイッチを押して電気を消して急に暗くなったから裏央が見えなくなったけど、ソファが軋む音がしたから、横になったんだと思う。

私も、こうなったらおとなしく従った方がいいかなと思ってベッドに入り、

「お休み、裏央」

と言って目を閉じた。

「ああ、お休み、真奈」

裏央の返事を聞きながら。

「っ！」

暫くして、眠りが浅かったのか物音で目が覚めた。

風が強いのか窓ががたがたと鳴っている。

雷が鳴っていないだけかもしれませんが……それでも夜にこつこつという音を聞くのは怖い。

一度意識してしまうと、目を閉じても中々眠れなくて、30分くらい経っても眠れなかった。

枕を抱えて起き上がりベッドから出て、裏央の所に行つて、

「裏央……裏央、起きて？」

呼びかけながら体を軽く揺する。

「ん……ん？真名か？」

裏央は直ぐに目を覚ましてくれた。

「うん」

「どうした？」

「物音が怖くて、寝られなくなったから、一緒に寝てもいい？」

「・・・・・・・・・・」

「裏央？」

珍しく返事がなくて、もう一度名前を呼ぶ。

「はあ・・・狭くてもいいのか？」

「うん。裏央が近くにいると安心できるから」

雷の時もそうだったけど、裏央に抱きしめられていると怖くなくなつた。

「分かつたよ」

裏央は起き上がって、先に私にベッドに入るように言った。おとなしく先に入り、隣に裏央が入ってくる。

肩と肩が触れあって、なんだかそれだけで安心できた。

「もう少しそっちに寄れないのか？」

「離れるからやだ」

「・・・はあ。じゃあ、いつそのこともっとくつつくか？」

「えっ？どつちやって？」

「どつちやって」

「ひゃ！！／＼／」

裏央がいきなり腕を回してきた。
それで一気にお互いの体が密着する。

「こ、これは・・・恥ずかしい／＼／」

「じゃ、離れるか？」

「・・・うん。このままがいい／＼／」

心臓がすくいだキドキして、聞こえてるんじゃないかと思ったと思う。

「・・・」

「あ」

裏央が頭を撫でてきた。

気持ちいい。

「ま、こわいことなんか何もないからな？ゆっくり眠れ」

「うん・・・ありがとう。おやすみ、りお」

「ああ」

目を閉じると眠気がゆっくりと広がって、私はすぐに眠りに付いた。

全く・・・少しは自分のことを考えて欲しいもんだな。

今日見ていて気付いたが、こいつは結構可愛い顔立ちをしている。

それに気付くとな・・・まあ、いいか。

「たく、無防備に寝やがって」

どうなっても知らねえぞ？

4月30日 土曜日 ピクニック その1

朝起きても俺が離さなかったのか、真奈が離れなかったのかは分からないが、くつついたままだった。

真奈を起こさないようにそっとベッドを出て、洗面と歯磨きをして朝飯の準備を始める。

暫くして、枕を抱いたまま真奈が起きてきた。

座らせて飯を持っていき、食べて部屋に送り返して完全に目が覚めるまで待って、今日の確認をして俺がアパートを出たのが、1時間ほど前のこと。

時刻は8時ちよいすぎ。

集合時間まではまだまだある。

なのに・・・

「なんでもう居るんだよ」

「あんだこそ、なんでいんの？」

由香がすでに周辺をぶらついていた。

ここは昨日来た公園で、適当に時間をつぶそうと思って来たらしいつがいたんだよ・・・。

「もしかしてあんたも参加するの？」

「んなわけ無いだろ？大体自分を嫌ってる奴が参加する奴がいるか？お前だつて俺が居たら来ないだろ？」

「当たり前でしょ」

「というわけで、俺はとつとと退散する」

「どこにでも行きなさいつての」

その由香の言葉を聞きながら公園を後にした。

先に行っておくかな・・・メール、メールつと。

適当に内容と俺がいくことと伝えないようにと書いて送信して携帯を閉じる。

少しし携帯が震えて見てみると電話だった。

「どうした？」

『どうして言っちゃ駄目なの？』

「俺がいるって知ったらあいつは来ないぞ？」

『え〜・・・』

「分かっただろ？まあ、散歩してたとか言えばなんとか誤魔化せる

だろ」

『・・・分かった。でも絶対いてよ?』

「ああ」

そう言って電話を切り俺は丘に向かった。

ゆっくり歩いたからか1時間半ほど掛かって俺は丘に到着した。
木の下に座って目を閉じ、眠りに着く。

ゲシ!

「いつて!」

突然の衝撃に目を覚まし見てみると片足を上げたままの由香が居た。
後には真奈たちもいて、困ったような笑顔を浮かべてこっちを見ている。

いや違った。

涼子だけは楽しそうな顔してる。

「また会ったな?」

「なんでいんの?」

「散歩してたらいつの間にかここまで来てたんだ」

言つと怪訝な顔で俺を見てくる。

「本当に？」

「嘘つく理由なんか無いだろ？」

「……………」

「由香ちゃん……いいじゃない別に。裏央くんだって別にいいでしょ？」

「こいつがいいならな？」

「あたし？」

みんなに見られて、由香は仕方なくと言つた風に頷いた。

「それじゃ、ごはん食べましょ？沢山作ってきたので」

真奈はそう言いながら持ってきたブルーシートを広げた。

その上に皿と重箱を置いて準備完了の様だ。

俺はまだ木の下で寛いでいた。

街の方をみるといつもとは違う風景が見えた。

人が行き交う商店街も少し上からみるだけで大分違う。

「裏央」

不意に名を呼ばれてみると真奈がサンドウィッチを皿にのせて持ってきていた。

野菜が多く使われた物で、もしかしたら俺のことを考えて作ってくれたのかも知れない。

「サンキュ」

皿を受け取って食べ始めると真奈が隣に座った。

今日の真奈の格好は薄い長袖にストールとホットパンツ？っていうのか、そんな感じの服で動きやすそうだった。

まあ、木登りの為だろうが。

一口嚙り咀嚼する。

「お、美味しい」

「ホント？」

「ああ。どこがどうとかは分らんが、美味しい」

「えへへ・・・よかった」

隣で笑顔になる真奈。

なんか涼子と美奈が

「やっぱり料理くらいできないと」

とか言っていた。

葵はこちらを見て微笑んでおり何を思っているのか計れない。

由香はそんな葵と話しながら楽しそうに食っている。

入学した時はこんなことをすることになるなんて思っても見なかったが、案外悪くないな。

これからはちよくちよく来るか。

誰も来ないからゆっくりできるし……。

「裏央……由香さんには言わないの？本当は散歩じゃないって」

「楽しんでるならそれでいいだろ？」

「そうだけど……」

「それよりお前も食べよ？折角作ってきたんだから」

「うん」

真奈はシートに戻り自分の分を皿にのせてやっと食べ始めた。

ブブブブ……。

携帯が鳴り表示を見ると店長だった。

「なんだ？」

『悪いがこれから出れないか？2人ほど急用でこれなくなってな？』

「ああ、分かった。30分くらい掛かるがいいか？」

『来てくれるだけでも助かるんだ・・・構わないよ。悪いな？』

「いいさ。じゃあな？」

『ああ』

通話を切ってこちらを見ている真奈たちにバイトが入ったことを説明した。

また真奈が悲しそうな顔をしていたから、頭を軽く叩いて一応謝ってから俺は店に向かった。

下り坂を走って行くのは危ないかとも思ったが、急がなければならぬこの状況でそんなことは言っていられないからな。
一気に坂を下って道に出てそこから速度を上げていく。

その甲斐あつてか思っていたよりも早く店に着いた。

中に入るとチーフが居たから挨拶だけして着替えてキッチンに行くと丁度料理ができた所だった。

「これ、何卓だ？」

「6卓だよ？あれ、きみ今日休みじゃ・・・あ、助っ人？」

「そういつこと。持って行くぞ?」

「うん。よろしく」

ホールに出て料理を持って行き、別の所からの注文などを受けてキッチンに戻り伝える。

「おお、来てくれたか」

店長が出てきてまた謝られたが気にするなと言って、呼び出しがあるまで待機。

適当に話していると呼び出しが掛かったのでまたホールに行き注文を取る。

この店の客もいくから慣れて来たのか、俺がため口で接客することに何も言わない奴が多くなった。

「お前、相変わらずだな?」

「別にいいだろ?」

「まあな」

何人かはこうして話しかけてくるようにもなった。

昼が近いからか客が多くなってきて、2時くらいまで結構忙しかった。

それからは客足も落ち着いてきて、店長が今の人数でも十分回せる

よようになったから帰っても良いと言ってきたが、俺はどうせだから最後までやると言って断った。

そして、時刻が5時を回った時、また呼び出しがあって出て行くと、

「あ、裏央！」

真奈達が居た。

意外なことに由香もいる。

無理矢理連れてこられた画が普通に想像できるが……。

「来たのか？」

「こいつがお前といたって言ってな？」

涼子はそう言いながら真奈を見た。

「そうなのか？」

「だって……寂しかったから」

「裏央君の前だと、真奈ちゃんキャラが変わるわね？」

「そうだろうか？」

「ま、とりあえず注文は？つってもお前ら腹減ってないだろ？」

「ポテト」

「はいよ」

言われたメニューを打ち込んでいく。

「……何も言わないの？」

「そしたらまた怒るだろ。ま、あん時は悪かったよ。じゃ、少々お待ちを」

自分でも分かる程やる気のない声でそう言ってキッチンに戻り、あまり時間も掛からずできたポテトを持って行く。

すると少し変化が。

「由香は帰ったのか？」

そう、由香が居なくなっていた。

「ええ。はいこれ」

「ん？」

ポテトを真ん中に置いて葵から差し出された紙を受け取る。見ると番号とアドレスが書いてあった。

裏を見ると真ん中に

『あたしもごめん』

とだけ書かれていた。

「なあ、葵？」

「なに？」

「あいつって不器用なのか？」

「そうかも知れないわね？」

葵はくすくすと笑っていた。

真奈も心なしか安堵したような顔をして俺を見ていた。

4月30日 土曜日 ピクニック その2

裏央がバイトの助っ人に行ってから、私たちはピクニックを続けていたけど、さっきまでの楽しさは感じられなかった。

由香さんは清々するみたいなのを言っていたけどなんとなく物足りなさそうで、先生達は明らかに不満装だった。

私だってそうだ。

昨日の朝から楽しみにしてたのに・・・恵理ちゃんだってそうだった。

でも、タイミング悪く風邪を引いてしまって今は部屋で寝ている。

結局裏央がいないまま、時間は流れて、4時頃になった時、私は我慢できなくなってお弁当を片付け始めた。

先生達はそんな私を見て不思議に思ったのか何をしているのかと聞いてきた。

「裏央といたいんです。皆さんだって裏央がいないとつまらないでしょう?」

そう言うと涼子先生と美奈先生はすぐに頷いた。

なんでも人の生徒を勝手に借りるなだそうだ。

裏央はあなたの物でも無いのですが・・・いや、今は言うのは止めておこう。

先生たちも片付けを手伝ってくれて思いの外早く終わり、渋る由香さんを葵さんが無理矢理引っ張っていき、私たちはその後を追って丘を下り始めた。

その途中で同い年くらいの4人の女の子が丘に登っているのを見かけたけど、今は店に行くことが最優先だ。

5時くらいに店に着き中に入って席に着いてから、まだいるか分からなかったけどボタンを押してみた。

そして出てきたのは、

「あ、裏央！」

裏央だった。

嬉しくてつい手を振って呼び掛けた。

「来たのか？」

素っ気なく言う裏央の質問に涼子先生が私が裏央といたって言ったとばらし、そうなのかと聞いてくる裏央に私は寂しかったからと答えると、美奈先生に裏央の前だとキャラが変わるって言われた。

というかこれが本来の私なんだけどね？

「ま、とりあえず注文は？つってもお前ら腹減ってないだろ？」

確かに裏央のいう通り、私たちはさっきまでごはんを食べていたからお腹は空いてない。

と考えていると、

「ポテト」

と由香さんが言った。

「はいよ」

裏央は何も言わずに打ち込む。

「何も言わないの？」

「そしたらまた怒るだろ？ま、あん時は悪かったよ。じゃ、少々お待ちを」

由香さんの質問に裏央はそう言って、謝った後にキッチンに戻っていった。

「由香ちゃん、そろそろいいんじゃない？」

裏央の姿が見えなくなった時に葵さんが由香さんにそう聞いた。

「.....」

何も言わず少しの間沈黙する由香さん。

「・・・葵、書く物ある？」

その質問に葵さんは何も言わず鞆からメモ帳とシャーペンを取り出して由香さんに渡した。

「ありがとう」

受け取った由香さんは表に何かを書いてから裏にも何か書いて千切ってから葵さんに渡した。

「それじゃ、お願い。あたし、先に帰るから。涼子先生、美奈先生、失礼します。真奈ちゃんも、ごはん美味しかったわ」

「ありがとうございます」

由香さんは代金を置いて店を出て行った。

そのすぐ後に裏央が来て、由香さんが帰ったのかと聞き、葵さんが答えながらさつき受け取った紙を渡した。

裏央は皿を置いてから受け取り表を見てから紙を裏返した。

どうやら書いてあったのは電話番号とメールアドレスみたいだった。

裏に書いてあったのは、裏央がちゃんと確認しているだろう。

「なあ、葵？」

「なに？」

「あいつって不器用なのか？」

「そうかも知れないわね？」

葵さんは笑いながら裏央の質問に答えた。

それから1時間くらい経って、裏央の助っ人も終わったみたいで、次に出てきた時は私服だった。

会計をしてから店を出て、葵さんと別れて私たちはアパートへの帰路についた。

196

その途中、裏央の携帯が鳴り、裏央が通話を始めた。

「どうした？」

「誰からかしらね？」

裏央を見ていると美奈先生が小声で聞いてきた。

「どうして私に聞くんですか？」

私も小声で聞き返す。

「あら？気にならないの？」

「なりま・・・」

言いかけて、自分が気にしていることに気付いた。

どうしてだろう？

「・・・・・・・・」

考えてみたけど分からなかった。

「ま、とりあえず真奈は寂しがり屋だから、よろしくな？・・・
・ああ、じゃあな？」

私のことを話していたみたいだけどそれよりも相手のことが気になった。

葵さんかな？

それとも、由香さん？

恵理ちゃんはアパートに居るけど・・・もしかして、私の知らない人？

結局相手だ誰かも聞けずにアパートに帰り、それぞれの部屋に戻ってから、私は軽いごはんを作ってから食べた。

それから歯を磨いてお風呂に入り、暫く携帯で昨日裏央のヘッドフォンで聴いた曲を聴いて過ごした。

10時を回って、私は特にすることも無くなり、電気を消してベッドに入ったけど、中々眠気は来てくれなかった。

楽しみだったピクニックは、微妙な気持ちのまま終わってしまった。

5月9日 月曜日 出会い

ピクニックが終わってアパート帰って、妹の様子を見てから自分の部屋で眠り、翌日からは特にイベントなども無く時は流れた。

強いて何かあると言ったら学校で由香が俺といっても不機嫌な顔をしなくなったことくらいか……。

バイトも順調でゴールデンウィークは……まあ、騒がしかったな。

特に風が治った妹のテンションがやたら高くて。

俺は殆ど毎日あの丘に行っていたが。

そんなこんなで今日はゴールデンウィーク明けの学校だ。

面倒だな……いつそのことずっと休んでいた。

そんなことを言うと真奈に怒られる訳で、何故かそれを葵と由香にも報告して電話を代わってまで

「さぼりは駄目よ?」

とか

「ば?」

とか、ってちょっと待て。

何故馬鹿だ?

まあ、結局さぼることは叶わず今日も学校へ向けて歩き、着いたら殆どの授業を寝て過ごし昼休みは俺、真奈、葵、由香、涼子、美奈の6人で保健室で飯を食う。

ああ、そう言えば最近真奈達はよく一緒に遊んだりする。

ゴールデンウィークに出かけてたりしてたからな・・・妹も一緒に帰って来た時の様子からして楽しかったのは間違い無いだろうが、どこか物足りない様な顔をしていた気がするが・・・どうなんだろうか？

昼休みも終わり午後の授業も終わって、今日はバイトは俺は休みだから暇つぶしにあの丘に行くことにした。

ピクニック以来あの丘が好きになった。

誰も来なくて静かで・・・音楽を聴くにはもってこいの場所だ。

なんてことは考えながら丘を登っていきもつ少しで木に到着すると言うところで、なにやら話し声が聞こえた。声からして女子みたいだ。

数は・・・3〜4人くらいか？

「ま、いいか。邪魔にはならんだろう」

木の所まで行ってみると、その女子グループの一人が俺に気付いた。他の3人もそれにつられてこちらを見る。

「あの・・・何か用事ですか？」

そう聞いてきたのは小動物を連想させる小柄な少女。

赤みがかった茶色の髪を肩に掛かるくらいまで伸ばしており、瞳も赤い。

制服から見るに4人共、どこか別の学校みたいだ。

「アタシたちの情報が漏れたとか？」

と言ったのは長身のすらりとした女子生徒。

長い黒髪を黄色いリボンで縛りツインテールと言うのか？そんな髪型にしている。

瞳も黒だ。

「もしかしたら追っかけ？」

これは最初の少女とさっきの女子生徒の中間くらいの身長の子。

髪はふわふわしていてウェーブが掛かっている。

色はクリーム色とでも言えばいいのか？

瞳は翡翠？そんな感じの色だ。

「・・・・・・・・」

そして最後に何も言わない無表情の女の子。

身長はこちらも中間くらいだ。
髪はなんか猫みたいな形してる。
色は蒼。
目の色も蒼だ。

「s k yのメンバーか」

声から何となくはそうだと思っていたが、顔を見てハッキリした。

「あら？アタシたちのこと知ってるのかしら？」

「ああ、あんたらの曲好きだしな」

「あ、ありがとうございますー！」

「嬉しいわね」

「……」

やはり無表情。

俺も人のことは言えんが。

「とりあえず自己紹介くらいしておくよ。俺は裏央」

「りお？変わった名前ね？」

「そうか？別に気にしたことは無いけどな」

ハッキリ言っつて名前なんかどうでもいい。
呼び方なんかも勝手にしてくれていいしな。

「アタシは鈴野亜紀^{すずのあき}。ボーカルとギター担当よ?」

「亜紀ちゃんがするならしない訳にはいかないわね。
私は安藤沙羅^{あずのうた}。ベース担当」

「え、えと・・・わたしは桐野莉子^{きりのりこ}です・・・サイドギターをしています」

「それで、この無表情っ娘が・・・」

鈴野が猫少女の名を言おうとした時、

「赤坂魅沙^{あかさかみさ}。ドラム」

とだけ言った。

なんか3人は驚いているが、どうかしたのか?

「ちよ、2人とも!」

「私も驚いたわよ・・・魅紗ちゃんが自分から名乗るなんて!」

「今までこんなことありませんでしたよね!?」

「騒いでる所悪いが、お前らここにはよく来るのか?」

俺の問いに興奮が収まつたらしい鈴野が答えた。

「え、ええ……ここは滅多に人が来ないから休むには絶好の場所なのよ。前は誰から居たけど、それからは見てないわね」

多分真奈達だな。

「こんなに景色が良いのに、誰もここまで来ようとしないうんて……お陰で休むことができるけど、皮肉ってこういうことを言うのかしらね？」

鈴野は俺の後の景色を眺めながらどこか悲しそうにそう言った。

「それは俺も同感だな……結局人つてのは今見ているもので満足しちまう奴が殆どなんだろう」

「……どういうこと？」

安藤が聞いてきた。

「新たな物を見ようとしないうんだよ。そこまで視野を広げることができないのか、初端から広げようと思わないのかは別として……多分、無意識だと思うが……」

少し広げるだけで……こんな景色が見られるのにな？」

「じゃあ、りおさんはどうしてここに？」

「以前来て以来、ここが好きになったんだよ……お前らだってそうなんだろう？単に人が来ないって理由だけなら、もっと別の場所だ

ってあるからな」

「・・・確かにそうね。アタシたちもこの場所が好きだから来てる」

「ま、それを邪魔する訳にも行かないから俺は帰るよ。じゃあな？」

背を向けて丘を降っていこうとしたら、

「ねえ」

と赤坂に呼び止められた。

振り向くとまたも3人が驚いている。

「なんだ？」

「今度はいつここに来るの？」

何故そんなことを聞くのかと思っただが、別にいいかと思ひ答えた。

「そうだな・・・バイトが無ければ、多分毎日くると思っぜ？」

「そう」

と短く返事をして、それからは何も言わなかった。

「ついでにお前らに言っておくぞ？」

「何かしら？」

「無理はするな。仕事柄厳しいとは思っだが、俺はお前らの曲を楽し

みにしてるんでな？そんじや」

俺は今度こそ丘を降っていった。

5月10日 火曜日 交換

翌日火曜日、バイト先に行って今月のシフトを聞き、今週は水・金・土の三日間なので、俺はまた丘に行くことにした。

真奈は今日もバイトで今週はあと1日、明日もあるみたいだ。

丘に着いて木に背を預けて座り、音楽を聴きながら景色を眺める。

鈴野が言っていた通り、ここは誰も来ないから静かに過ごせるが、それはこの景色を知らないやつが多数いると言うことでもある。

ほんの少し視野を広げるだけでいいにも関わらず……。

目を閉じれば肌を撫でる風が心地いい。

しばらくそうしている内に俺は眠ってしまった。

パラ、と何かを捲る音が聞こえて目を覚まし、最初に見たのは夕焼けに染まった空。

ヘッドフォンは何かの拍子に外れてしまったのかもしれない。

首に掛かっていて、まだ音楽は流れていた。

ピ、と切って横を見ると、

「よお」

「ん」

赤坂がいた。

短い返事をして太股の上に乗せた本を読んでいる。

会話はそれっきりだったが、お互いに別に気にしていないからか、特に気まずいなどと言った感じはなかった。

風の音と気のさざめく音、そして赤坂が本を捲る音だけが、この場を支配しているような・・・そんな感覚になる。

赤坂の持っている本は小さな文庫本。

ブレザーのポケットにも余裕で入るくらいの大きさだ。

鞆にはスティックがあるから練習の後に来たのか、仕事が落ちつていいのか・・・まあ、どちらかだろうな。

静かなまま、1時間ほどだろうか？

時は流れ・・・パタン、と赤坂が本を閉じた。

鞆にしまつて立ち上がる。

「帰るのか？」

「クンと首肯する。」

「送ろうか？」

「・・・いいの？」

「まだ夕方といは言え、女が1人じゃ危ないからな」

とか言いながら真奈はほったらかしなんだが・・・明日からはもっと気を付けておかないとな。

携帯を見ると1件メールが入っていた。

「っと、そのまえにちょっと待ってくれるか？」

また首肯する。

送り主は真奈。

内容は今どこにいるのかと何時くらいに帰ってくるかというもの。

それに、少し用事ができたからそれを済ませたら戻ると返す。

返事はすぐに返ってきて、見ると

『分かった』

とだけ書いてあった。

「待たせたな？行くか」

またまた首肯。

たぶんずっとだろうな。

「家はどの辺なんだ？」

「ん」

ぴ、と商店街の方を指さす。

「アバウトだな」

とりあえず丘を降っていき、まずは商店街に出る。

この時間は買い物に来ている奴や俺と同じように学校の帰りに寄り道している奴がいて、賑わっている。

ゲーセンなんかは特にそうだな・・・主に男だろうが。

ある音楽店を通りかかった時、聞き慣れた音楽が聞こえてきた。

見てみるとそこにはskyのポスターが貼ってある。

楽しそうな表情をして歌っている鈴野にやはり楽しそうにギターとベースを弾いている桐野と安藤。

そしてやはり無表情な赤坂。

くい、と袖を引かれ、振り向くと赤坂が俺を見上げていた。

「どう」「おい、あれってskyの赤坂じゃね!?!」……………」

尋ねようとしたら赤坂に気付いた奴が声を上げた。

それはすぐに広がり、俺たちの周りには人が集まってきた。と言ってもそんなに多くはないが…………。

「ホントだ!でも隣の人誰?」

注目は俺にも集まってきた。

まあ、今人気のバンドメンバーといれば自然とそうなるよな…………。

「暇人共が…………」

赤坂の手を取り歩き出す。

なんか周りの奴らが何か言っていたが、どれもくだらないことばかりだし、そもそも聞く気なんかないからな…………。

少し進んだ所にある本屋の前で赤坂が止まった。

「どうした?」

聞くと本屋を指さした。

何か買いたい本でもあるんだろう。

本屋に入ると赤坂はすぐにレジに向かった。

店員は慣れているのか、すぐに後の棚から一冊の本を取り出して、確認を取っている。

赤坂は一つ頷き、会計を済ませて戻ってきた。

「もういいか？」

「うん」

機嫌がいいのか、言葉で返事をしてきた。

店を出て住宅街に入る頃には辺りは暗くなっていた。

マンションに着くと、そこで赤坂が止まった。

どうやらここに住んでいるみたいだ。

「それじゃな？」

それだけ言っただけで来た道を引き返そうとしたら、

「待って」

と言われた。

振り向くと赤坂は鞆に付いている小さなポケットから携帯を取り出した。

「交換」

なるほどと納得し、俺も携帯を取り出して近づき赤外線でお互いのアドレスと番号を交換する。

「試しに何か送ってみる」

首肯して何か打ち出す。

携帯が震えて送り主を見ると、赤坂の文字。

『今日はありがとう。楽しかった』

と短い文章で書かれていた。

「俺も楽しかったよ」

「ん」

ポンポンと頭に手を乗せて軽く叩くと一瞬だけ目を閉じる赤坂。

「ああ、そつだ。バイトだが今週は水・金・土だ。一応教えとくよ」

「明日は行かないの？」

「ああ」

「そつ」

どこか落ち込んだ様子を見せる赤坂になぜかという疑問が生まれる。

まあ、いいか……。

「じゃあな？」

さつきまでとは違って弱々しく首肯して、赤坂はマンションに入っ
ていった。

それを見届けて俺もアパートへと戻るため来た道を引き返す。

「遅い！今何時だと思ってるの？」

「いや……8時だが？」

「メールの返信から2時間以上経ってるよ！何してたの？」

「色々あったんだ……つつか何でお前は俺の部屋にいるんだよ？」

「え？」

帰ってきて早々真奈に怒鳴られたが、よく考えてみればここは俺の
部屋だ。

今更間違える訳もないし、鍵だつて掛けていた筈だがな……。

「涼子たちか？」

「……うん」

「はあ……」

あいつらはどこで合鍵を手に入れたのか、たまに勝手に入ってることがあるんだよな。

「まあ、いい……とりあえず腹が減った」

「あ、じゃあ、私が作るよ?」

「いいつて、バイトで疲れてるだろ? ゆっくり休め。明日もあるんだからな?」

「……そうだけどお」

「ただでさえ人が足りないんだ……もし、倒れたりしたらどうするんだ?」

「う……分かった。お休みなさい」

「お休み」

若干落ち込みながら部屋を出て行く真奈を見送り、晩飯を作るうかと思っただがやっぱり面倒になって風呂もシャワーだけにして俺はさっさと寝た。

早く休миになつて欲しいもんだ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家なるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1573x/>

俺と私

2011年10月19日08時12分発行